

甲斐国山梨郡国玉村文書目録・解題

西村 慎太郎
日本史特殊研究受講生

論文要旨

本稿は2010年度より開講している大学院人文科学研究科史学専攻日本史特殊研究（担当 西村慎太郎）での担当教員と受講生などで行なった歴史資料の保存・調査活動をまとめたもので、具体的には甲斐国山梨郡国玉村文書の目録とその解説、受講生の問題関心による主な事項の説明、当該地域の特質を明らかにするため国玉村明細帳の翻刻、文書を写真撮影する際の方法論の提示するものである。甲斐国山梨郡国玉村文書は天保4年（1833）～明治7年（1874）に及ぶ数量336レコードの文書群であり、当該地域の文書はこれまで確認されておらず、そのため『山梨県史』にも収録されていない新出文書である。文書群は国玉村の年貢収奪・年貢廻米・用水管理などの様相を明らかにするものが多く、その他名主を務めた鷹野家の私的な文書も含まれており、地方城下町に隣接する村落の研究分析を行なう上でも貴重なものであり、今回はその基礎的な作業として目録と関連する論稿をまとめた。

キーワード【山梨県、甲斐国、史料保全、目録、アーカイブズ学】

はじめに

本稿は2010年度より開講している大学院人文科学研究科史学専攻日本史特殊研究（担当 西村慎太郎）での担当教員と受講生などで行なった歴史資料の保存・調査活動をまとめたものである。この授業はシラバスでも記したように、「未整理の史料をどのように取り扱うかを学ぶ。調書作成、目録作成をメインに行なうが、史料読解初心者（特にくずし字読解初心者）は徹底的な講読作業を行なう。また、保存の方法やマイクロカメラ・デジタルカメラの利用についても実践する」ことを目的とした。具体的には、歴史研究者として歴史資料の保存・調査活動の即戦力を育成するための講義であると言える。また、民間所在資料の保全活動など緊急的でありつつも日常に蔓延している歴史資料の散逸に対応できる人材に育てるため、理念や現状分析、方法論の提示と議論も行なっている。ここで述べる民間所在資料とは図書館・博物館・文書館などの収蔵施設に収められている歴史資料ではなく、個人宅などで保管されている指定・未指定を問わない歴史資料のことである。拙稿でも明らかにしたよう

に、それらは私有財産であるため、多くの場合は文化財行政から切り離されつつ（同時に近年の公文書管理法から切り離されつつ）、例えば当主の代替わりや引っ越し、災害、年末の大掃除などによって散逸する可能性と常に隣り合わせになっている（拙稿「文書の保存を考える」『歴史評論』750、2012年ほか）。また、近年では公務員削減・平成の大合併などによる文化財担当者や学芸員の多忙化によって、状況の悪化が指摘されており（新井浩文「どこへ行く古文書Ⅱ」2012年11月16日NPO法人歴史資料継承機構例会報告）、上記のような課題に対応できる人材が能力的にも理念的にも必要であろう。

そのため、2013年度段階で甲斐国山梨郡国玉村文書・上野国樽村文書・三河国清水村文書の保存処置・目録作成・目録編成などを行なっている。本稿ではこのうち甲斐国山梨郡国玉村文書についての作業成果を提示したい。「1. 甲斐国山梨郡国玉村文書目録作成に当たっての解題」では2010年度～2012年度のティーチングアシスタント武子裕美氏による同文書群の解説を記した。表記方法は国文学研究資料館が毎年刊行している『資料目録』に準拠している。「2. 主な文書の内容紹介」では受講生の問題関心による主な事項の内容紹介を提示した（取りまとめは吉成香澄氏による）。「3. 史料紹介「国玉村村明細帳」」では当該地域の特質を明らかにするため甲斐国山梨郡国玉村文書番号135（以下、文書番号についてはNo.と略す）「国玉村村明細帳」の翻刻を掲載した（取りまとめは萱場真仁氏による）。また、近年、災害などに伴う歴史資料の保全に際して通常の資料撮影ではなく、早急に資料を撮影する方法論の模索が成されている（例えばNPO法人宮城歴史資料保全ネットワークなど）。そこで今後は全点写真撮影を行なう予定である同文書群についても現在俎上に上がっている議論を踏まえつつ、「4. 一眼レフカメラによる資料撮影の手引き」として方法論を示した（上條静香氏による）。

なお、甲斐国山梨郡国玉村文書は2010年に学習院大学文学部史学科が古書店より購入した。甲斐国国玉村とは、現在の山梨県甲府市に該当する。文書群名は購入時の名称を生かしつつ、郡名を追加した。撮影後は速やかに地元の収蔵施設への移管を行ない、地元の博物館展示・地域史研究・学校教育・社会教育に役立てていきたいと考えている。（文責 西村慎太郎）

1. 甲斐国山梨郡国玉村文書目録作成に当たっての解題

文書群名：甲斐国山梨郡国玉村文書

年代：天保4年（1833）～明治7年（1874）

数量：336レコード

文書の伝来と整理方法

甲斐国山梨郡国玉村文書は、学習院大学が2010年古本屋から購入した文書群である。段ボール箱2箱に納められており、購入以前の状況は不明である。しかし、何らかの秩序に基づいて段ボール箱に納められたと考え、今回は段ボール箱に納められた現状を重視した。すなわち、史料番号を付与する際、段ボールの上から下、北から南、東から西の取上原則を遵守し、巻き込みがあるものに関しては外から内に番号を付与した。整理上煩雑になるため、なるべく枝番号が発生しないようにした。文書は番号を付与する1点ごとに中性紙封筒に収め、さらに中性紙でできた文書箱に納めた。

甲斐国山梨郡国玉村について

現在の甲府市国玉町と里吉二丁目にあたる。村名はこの付近が甲斐国山梨・巨摩・八代三郡の境界にあたり国の中央部に位置するため、村内の甲斐国三宮国玉明神（現玉諸神社）が国御魂神を祀る事に由来する。

天正3年（1575）2月14日の初鹿野伝右衛門（昌久）宛の武田家印判状に「国玉郷」とみえ、同所96貫300文などの地が重恩として与えられている。武田氏滅亡後の天正10年8月27日、国玉のうち70貫文と同所手作前30貫文が初鹿野昌久に本領として宛行われた。12月7日には国玉の内1貫827文が山田次左衛門尉に、国玉稲部分名田5貫文と屋敷1間が成島勘五郎（宗勝）に、翌11年10月21日には国玉5貫文が岩間大蔵左右衛門尉にそれぞれ安堵されている。

国玉明神の神領も武田氏時代からあったらしく、同11年4月24日、国玉郷92貫500文などの地が安堵された。郷内における国玉神社神領の比重が高いことがわかる。天正17年11月23日伊奈忠次神領証文では国玉郷の170俵7升到確定された。

慶長古高帳では高876石余、ほかに国玉領61石余、慶長6年（1601）の検地帳では田46町8反余・畑7町6反余、桑7束、他に永荒地3反余、屋敷6175坪であった。元禄9年（1696）の濁川改修後の元禄14年（1701）の検地帳では高798石余、反別は田41町1反余・畑7町3反余となった。享保9年（1724）から幕府領となり石和代官所支配となった。以後の詳細は不明だが、川田代官支配を経て宝暦末までには甲府代官支配になったようで、その後石和代官支配になり、享和2年（1802）に再び甲府代官支配となった。文政6年（1823）までには石和代官支配となって幕末近くまで続いたらしい。旧高田領取調帳では甲府代官支配。

文化初年の家数38・人数151、馬2。このほか国玉明神の神主支配の社家3・人数19、馬1。天保4年（1833）の村明細帳によれば家数37・人数164、他に神主1軒・社家3軒・寺4軒、寺社関係人数14。

用水は国府（現春日居町）・山崎（現石和町）・松本（現石和町）三ヵ村分内の河原から笛吹川の水を取った。そのため国玉村を堰の用水元とする六ヵ村組合が構成された。

農閑には男が板垣村御林で落葉・下草・薪を取った。

甲州道中柳町宿大助郷十六ヵ村の一つであるとともに、享保10年から同道中石和宿の定助郷を勤めた。

村内には寺子屋が三ヵ所あり、神官や僧侶が読書・習字などを教えていた。

慶長6年の検地によれば、地内には「前田・寺田・ほりのまへ・よこ町・一の坪・七反た・こくらてん・つかた・六反た・まへた・ふかこ・おさた・むめの木・町た・てうら・まへほりた・かまつくり・まゝ上・といつめ・つか越・かまこ・西畑・きめん・さすけ・うらかへ・宮ノ西・おちあい」という小字があった。

明治4年(1871)山梨県に所属。明治7年里吉村と合併、国里村となる。

寺社として、曹洞宗能満寺・長泉寺、玉諸神社がある。旧暦2月と10月の申の日から25日間は玉諸神社の神事入といい国玉村内では婚姻・普請などが禁忌とされたという。

鷹野家について

甲斐国山梨郡国玉村文書に多く見られる人名が「鷹野甚左衛門」である。甲斐国山梨郡国玉村文書は、鷹野家に伝来したものと考えられ、サブフォンドにも鷹野家という項目を設定したため、ここで簡単に鷹野家についてまとめたい。

鷹野家は名主・副戸長を勤める家で、名主役は嘉永4年(1851)、安政2年(1855)、安政7年(1860)、文久3年(1863)、元治元年(1864)、慶応3年(1867)、明治4年(1871)に勤めている。また、No.23では名主役について相談を受けており、村内での有力者と言えよう。

系図等が残されていないため、人間関係は不明であるが、幕末期に当主であったのが甚左衛門、明治期に副戸長などを勤めているのが甚右衛門と考えて良さそうである。

文書群の階層構造と内容

本目録では文書群の階層構造を追求するよう努めた。甲斐国山梨郡国玉村文書の構造を整理した上で、文書の性格に応じてサブフォンドを設定し、機能や役割についてシリーズを設定した。

今回はこの文書群は鷹野家において伝来されたものと考え「鷹野家」というサブフォンドを設置した。また鷹野家が勤めていた役職に関わる文書も多数見受けられたため、近世の役職である「名主」、近代の役職である「副区長」というサブフォンドを立てた。

以下、シリーズごとに階層構造と内容を説明する。

01. 鷹野家/01. 質地・借金：11レコード

鷹野家の土地経営としての証書類を収録した。土地に関しては国玉村内から収集している

様子が見える。

No.153 は夏目原村の百姓が鷹野甚左衛門から借用をしているが、夏目原村は現在の笛吹市御坂町夏目原にあり、位置関係など両者の関係性は不明である。

01. 鷹野家 /02. 信仰・文化：15 レコード

寺社に関するものと、和歌や絵図などを収録した。

No.98 は櫻井政能の顕彰碑の碑文写しである。櫻井政能（1649-1731）は甲府藩士で、代官を勤めた。元禄 9 年、濁川を改修、濁川の流れを笛吹川へ合流させるというもので、距離およそ 2,150 間という大規模工事であった。これにより蓬沢村・西高橋村及び周辺の村々は廃村を免れ、工事以前沼地化してしまっていた蓬沢村は元禄 14 年の検地で村高 653 石 7 斗 5 升から 702 石 8 合に引き上げられた。これを称え元文 3 年（1738）に櫻井の顕彰碑が建てられたのである。

国玉社は国玉村の北西にある現在の玉諸神社を指す。江戸時代末まで「国玉大明神」と称され、甲斐国三宮と称された。祭神は大国玉大神。社領 61 石余り、屋敷地 1,308 坪が安堵され、社領は寛永 19 年（1642）以後朱印地として幕末に至る。

01. 鷹野家 /03. 土地：2 レコード

鷹野家の耕作地の絵図面か。長泉寺は国玉村内にある寺で、曹洞宗潜龍山長泉寺という。2 点とも同じ場所を描いたものである。

01. 鷹野家 /04. 金銭受取：7 レコード

日向屋佐右衛門との金銭のやり取りの史料が多く見られるが、日向屋佐右衛門については不明である。その他西高橋村十左衛門など、近隣の人間との金銭のやり取りが行われているようである。

01. 鷹野家 /05. 水車：1 レコード

元治 2 年（1865）に鷹野家に水車が売り渡されていることは、鷹野家の経営について考える点で重要な問題であろう。そのため 1 レコードであるが、水車としてシリーズを立てた。

01. 鷹野家 /06. 本宅普請：1 レコード

鷹野家の建造物に関する史料である。文久 2 年（1862）に鷹野家は本宅を普請しており、その際の計画書がある。家を見ることで鷹野家がどの程度の規模であったのか推し量ることができよう。

01. 鷹野家 /07. その他：7レコード

白紙、くくり紐などをここにまとめた。

02. 名主 /01. 年貢・村入用：113レコード

ここでは国玉村名主役として作成・伝来された年貢勘定目録などを収録した。

甲斐国中三郡（山梨・八代・巨摩）は大小切税法に基づいて、米のほか貨幣による納税が行われた。税法の概要は「村明細帳」に記されている。納税法は、納税米額の三分の一は小切といって米4石1斗4升を金1両に換算して貨幣納にする。三分の二のうちの三分の一は領主が示すその年の米価で貨幣納とし、残りの三分の二を米納とした。

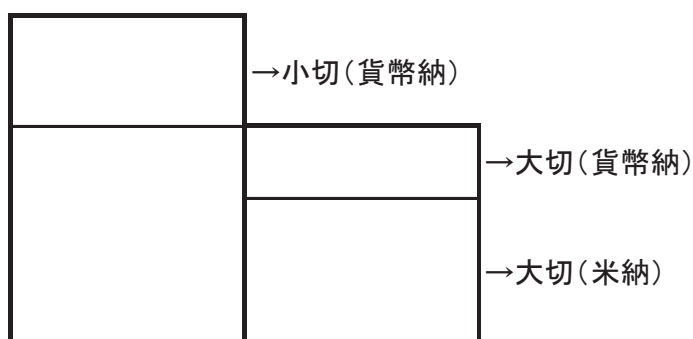


図1 大小切税法

02. 名主 /02. 領主からの手当・貸付：72レコード

水難・地震などの災害や不作のさい、代官所から貸付金をうけている。その請取や返納に関する史料である。

また、No.176-12-2 などに見られる松本村大蔵寺とは現在の石和町松本にある真言宗智山派松本山大蔵経寺である。

02. 名主 /03. 用水組合：38レコード

濁川には八ヵ村組合があり、板垣村・坂折村・里吉村・七沢村・上阿原村・国玉村・西高橋村・蓬沢村で構成されていた。このうち西高橋村と蓬沢村は蓬沢村分内の清明待から用水を引いて利用しており、国玉村文書に見える六ヵ村組合はこの二村を引いた村々である。

また、甲斐三郡に通用された金貨を甲州金という。1両の目方は4匁である。甲州金と小判の両替については、元禄9年（1696）3月21日甲府町奉行の竹川監物信成と渡辺武右衛門定長が、町触にて江戸駿河町両替屋三井次郎右衛門と泉屋三右衛門が担当することを伝達している。引替は幕府の公定ではなく「相対」相場とされたが、相場自体は不明である。

No.123-13 には「甲銀」という表記があるが、甲州銀という銀貨が実在したのではなく、

甲州金 1 両を銀 48 匁の相場として甲州金に換算した銀建て表示として使用されたものである。『甲斐国志』には甲州金 1 分＝甲銀 12 匁とある。

02. 名主 /04. 御用留・日記：8 レコード

村用日記帳であるが、入用控えとして記録されているものである。基本的に村費の出入りが記載されている。

02. 名主 /05. 名主役：13 レコード

名主役の交代についての史料が多い。国玉村では年番名主制であるが、No.53 などは名主役が拒否されたため入札を行っている様子がみられる。名主に関しては名主のなり手がいないため、年番とすることに取り決められた背景があり、それが No.7、No.10 の史料から読み取れる。また毎年名主が交代していたわけではなく、隔年に交代することもあるようである。名主役は 8 月にその交代の時期を迎える。No.87 など名主役就任についてもめているようで、村中から嘆願書が出されている。

名主役についてではないが、ここに収録した No.53 や No.23、24 などから当時の国玉村の家数・当主の名前を知ることができる。

02. 名主 /06. 質地・借金：19 レコード

質地請戻し、質地流れなどに関する史料を収録した。No.8 など何点かに見られる「上連雀町」は、現在の甲府市中央にある町である。上連雀町幸十郎と国玉村二郎左衛門との質地請戻について、国玉村名主甚左衛門が仲立ちをおこなっている。

02. 名主 /07. 国玉村・村人関係：11 レコード

No.135 に村明細帳が見られる。今回翻刻を掲載しているものであるが、山梨県教育委員会、県史編さん室が刊行している『山梨県史資料叢書 村明細帳』のシリーズには国玉村のものは掲載されておらず、国玉村の様子を知るために貴重な史料である。

02. 名主 /08. 金銭受取：3 レコード

明治 3 年に濁川に架かる橋の普請を行った際、愛宕町の人々に普請を依頼した請取書である。愛宕町は甲府城の北東にある町人地で、職人が多く、江戸末期には多くが日雇い・賃稼であった。

02. 名主 /09. 寺社：5 レコード

No.54 の宝蔵院は現在の甲府市愛宕町にあり、愛宕山を山号とする。寛永 19 (1642) 年以

降の寺領9石余が朱印地となった。

No.175の八代郡二ノ宮は現在の御坂町二之宮にあり、一宮浅間神社、三宮玉諸神社と並ぶ二宮美和神社である。4月第2亥日に行われる夏御幸、11月第1亥日に行われる冬御幸はそれぞれ甲斐国最大の祭礼で、三社が合同で執り行う。大洪水に例年のように見舞われる甲斐国を守護する川除祭であった。三社による神幸は明治期中止となっている。当史料から祭礼以外に神社間の交流があることがわかる。

03. 副区長：10 レコード

明治6年(1873)から7年にかけて副区長を勤めており、その期間の布達や御用留等である。明治6年の年貢勘定帳、紋紬税金納期に対する布達もあり、国玉村の明治始めの納税状況が見られる。帳外れが大半であるため、取り扱いには注意されたい。(文責 武子裕美)

参考文献

『山梨県史3 近世1』2008年

『山梨県史4 近世2』2009年

『甲府市史 通史編 第二巻 近世』1992年

『日本歴史地名体系19 山梨県の地名』平凡社 1995年

『角川日本地名大辞典19 山梨県』角川書店 1984年

地方史研究協議会編『甲府盆地—その歴史と地域性』1984年

飯田文弥『近世甲斐産業経済史の研究』国書刊行会 1982年

磯貝正義・村上直編『甲斐近世史の研究 下』雄山閣 1974年

『国史大辞典』

『寛政重修諸家譜』

2. 主な文書の内容紹介

ここでは受講生各位が文書の目録作成作業に関心をもった文書・論点について、文書の概要紹介するものである。(文責 西村慎太郎)

国玉村と寺社

No.175「差出申一札之事」は端裏に「当時矢口左門之願書」とあり嘉永7年(1854年)2月5日、信州松本家中(松平家)唐沢三郎左衛門忬矢口左門が甲斐国三ノ宮である国玉村玉諸神社の社家役に召し抱えられるために国玉村側に願い出たところ許可されたことに感謝するとともに名主甚左衛門らには迷惑かけないという内容で、甲斐国二ノ宮である八代郡美和

神社の社家星野下総と山梨郡国玉村長泉寺から国玉村甚左衛門と佐吉宛てのものである。差出の長泉寺国玉村内の寺院で、『甲斐国社記・寺記』（以下、社記・寺記）によると曹洞宗で山梨郡山宮村青松院の末寺である。

次に No.82 「院号料請取手形之事」は天保4年（1833年）11月、甲州金20両を受納し先祖代々まで院号に居士、大姉を許容したという旨で、山梨郡国玉村能満寺住持の萬国から甲府八日町二丁目の大黒屋喜八殿に出された。社記・寺記によれば曹洞宗能満寺は慶長8年3月朔日国玉村内の三百坪寄進の黒印状をもつ山梨郡鎮目村保雲寺の末寺であり、宛名の大黒屋喜八は質屋であることが甲府町年寄の「御用日記」（『山梨県史 資料編9 近世2』山梨県、1996年）から確認でき、慶応元年の「質屋仲間議定取究連印張」（『甲州文庫史料 甲府株仲間編』山梨県立図書館、1974年）には御府内質屋仲間の一軒に大黒屋喜八郎とある。

最後に No.54 「乍恐以書付御利害下奉願上候」安永8年（1779年）5月4日は差出が甲府愛宕町真義真言宗宝蔵院の通道と山梨郡国玉村城福寺住圓学、石和御役所宛て。宝蔵院は本寺高野山金剛三昧院の末寺で家光以来朱印をうけ、城福寺（社記・寺記には常福寺とある）は宝蔵院の末寺である。城福寺は貧しく無住がちで田畑二反余の耕作がままならず宝蔵院を通じ国玉村で耕し、年貢や夫錢も村で出すよう依頼していたが、城福寺と宝蔵院から村に出すことになっていた作徳金が払われず村からの対談にも行かなかったため役所へ訴えられた。その訴えについて城福寺と宝蔵院は話し合いに応じ村の要求を受け入れるため、役所に対し、村からの訴えを取り下げるようお願い上げた。

以上3点から、国玉村において、名主が信仰の責任者として社家の認可、村内寺院との対話をし、能成寺は甲府城下町の有力商人にも信仰されていたことがわかる。（文責 高増慧）

国玉村の名主役

嘉永4年（1851）年9月に作成された No.74・149・150 より国玉村の名主役の様相の一端を述べたい。

国玉村では、嘉永年間に名主役の選び方に変化が認められる。No.149によると、嘉永元年中に村方で差し纏れがあり、以後3年間に限り入札で名主を選ぶことになった。期限が明けると、先例通り隔年番に名主役を相勤めるように同役一同相談の上、内議定で取り決めたが、村方小前から入札で名主役を決めようと主張された。

No.150 は作成年代が「嘉永四亥年九月」とのみで日にちが書かれていないため、No.74（嘉永4年9月24日作成）・No.149（嘉永4亥年9月23日作成）より前に書かれたのか、後に書かれたのかは年代のみではわからない。No.150 には、藤吉の名主役は来る嘉永5（1852）年8月までで、万一持病が発した場合は安次郎が引き請ける、とあるので年番制は任期を1年間であったものと思われる。（文責 井上知明）

安政2年の国玉村について

ここでは安政2年(1855)の年貢関係史料をみていきたい。なお、国玉村文書のなかで安政2年の年貢関係史料は、No.84「当卯御年貢請取帳」、No.118「当卯御年貢勘定帳」、No.203「当卯御年貢差引帳」、No.210「当卯御年貢大小切割紙帳」など比較的良好揃っている。ただし、今回は字数に限りがあるため、No.118の内容から国玉村の年貢の様相を考察する。

No.118は、国玉村の年貢対象ごとにそれぞれの持高と、それに対する年貢納入額が記載されたものである。これをみると、村内の年貢対象者は50件で、そのなかに寺が3件(うち1件は2か寺をまとめて記載)、屋敷地が3件、ほかに隠居2件が含まれている。上記の8件をのぞいた人々の持高をみると、50石以上は二郎左衛門一人のみで突出しており、次に30～35石に3人、20～29石に4人、10～19石に5人、1～9石に14人、1石未満が15人であった。

また、国玉村の村高について、『日本地名大系 山梨県の地名』では、元禄14年の検地帳から高798石余とし、『旧高旧領取調帳』では870石7斗3升1合弱としている。しかしNo.118によると、べ高は799石2斗9升8合2勺とあるが、そのうち村方寄が442石2斗9升2合5勺で、残りの356石9斗9升8合2勺は越石高寄となっている。

以上から、安政2年の国玉村は村高とされた額のうち半分近くが越石高であったこと、さらに村内の百姓の多くが10石未満であったことが判明する。(文責 吉成香澄)

桜井孫兵衛政能顕彰碑(地鎮銘)と濁川改修

No.98「地鎮銘之写」は、現在も山梨県甲府市西高橋町に残されている桜井孫兵衛政能の濁川改修の事蹟を讃えた顕彰碑に関するものである。

桜井孫兵衛政能は、『寛政重修諸家譜』によれば、「櫻田の館にをいて清揚院殿(徳川綱豊：引用者註)につかへ、代官をつとむ」とあり、元禄8年(1695)の「甲府様御人衆中分限帳」にも甲州支配所代官触頭としてその名前が見られる。史料中には「元禄甲戌の年郡司と成て」とあり、「元禄甲戌の年」は元禄7年(1694)であるので、ここから桜井孫兵衛政能が元禄7年(1694)から甲州支配所代官触頭を勤めていたことが窺える。

濁川の改修は桜井孫兵衛政能が甲州支配所代官触頭を勤めていた元禄9年(1696)3月28日から同年5月16日にかけて行われた。濁川は元来勾配が少なく、停水状態を作っては近くの村々の田に水損をもたらす発生源となっていた。特に蓬沢村(現山梨県甲府市蓬沢)と、隣の西高橋村(現山梨県甲府市西高橋町)はこれらの川の水害の影響を受けやすい位置に存在しており、史料中に「大半作沼」という文言も見られることから、当時両村は一面沼地と化している状態であったことが窺えよう。また、こうした水害は甲府城下にも被害を及ぼす危険を孕んでおり、濁川改修はこのような状況の中行われたのである。

ところで、桜井孫兵衛政能の顕彰碑を建てたとされる斎藤六左衛門正辰とはどのような人

物であるのか。斎藤六左衛門正辰は、桜井孫兵衛政能の兄政蕃の孫に当たる政命のことで、今現在も残る祠は享保18年（1733）12月14日に、顕彰碑（地鎮銘）は元文3年（1738）7月に斎藤六左衛門正辰が来甲した際にそれぞれ建てられたものであるとされている。本史料中にも、斎藤六左衛門正辰が「厚恩を報さんかため」碑を建立したことが記されている。

斎藤六左衛門正辰がどのような真意を以て桜井孫兵衛政能の顕彰を行おうとしたのか、また端裏書に見られるように、時代が下った慶応4年（1868）に鷹野福保という人物がこの顕彰碑にどういった形で関与したのかについては今回明らかにすることが出来なかった。しかし、本史料は鷹野家や鷹野福保という人物が地域において果たした役割を考える上でも、そして当該地域の歴史が如何に語り継がれてきたのかということを考える上でも、重要な史料と言えるのではないだろうか。（文責 萱場真仁）



【写真】「桜井孫兵衛政能顕彰碑（地鎮銘）」（右）と「桜井孫兵衛政能生祠」（左）
（山梨県甲府市西高橋町、撮影萱場真仁）

幸十郎土地請戻し一件

筆者担当の一連の史料は、すべて同一の案件に関するもので、甲府連雀町の住人幸十郎の所有していた土地の請戻しに関するやりとりを記したものである。この一件は、万延元年（1860）に甲府連雀町の幸十郎が、8反1畝5分 分米13石2斗4合3夕の土地を1年季、甲金50両で、国玉村の二郎左衛門へ質入し、その土地を、文久二年（1862）から文久四年（1864）にかけて、請戻しを要求した（No.42）というのが基本的な概要である。しかし、実

際には、この土地で長年借家を建て暮らしていた国玉村の住人鎌吉等が、幸十郎へ二郎左衛門からの請戻しを願い出し (No.69)、同時にまた、鎌吉達自身が二郎左衛門との独自のやりとりの中で、二郎左衛門に対して、訴訟を行う (No.28) など、複雑な様相を呈している。

この一件は、文久三年 (1863) 十二月十五日に一端、立入人等を立てた上で、幸十郎へ土地を請戻すという内容で話がまとまりかけるものの、二郎左衛門が対談所へやってこなかったため、内済は不首尾に終わる。結局、折衷案として、仲裁者である国玉村の役人中が土地の管理を一任されるというかたちで、事態は収束することとなる (No.8)。

この一連の事件で興味深い点は、請戻しを要求する元地主の幸十郎と請戻しを拒否する現地主の二郎左衛門という単純な構図ではなく、実際には、この土地に借家をして暮らしていた鎌吉や善右衛門といった者達が、自身の権利を主張し、積極的に請戻しを要求している点である。このことは借家を行うような、零細な小百姓層の所有（ここでは屋敷地）が、地主側の土地所有にすら影響を与えうるという点で非常に興味深い。

また、仲裁者（立入人）の中に浪人（甲斐国浪人に関する詳細などについては、山本英二「甲斐国「浪人」の意識と行動」(『歴史学研究』613、1990年)、同氏「浪人・由緒・偽文書・苗字帯刀」(『関東近世史研究』28、1990年他))の肩書を持つ、八代郡夏目原村の小沢平治右衛門なる人物の存在 (No.28、42、67) が含まれていることもまた興味深い。実際にこの件に関して、小沢平治右衛門が立入人という立場においてどのような役割をはたしていたのかは判然としないが、甲斐国浪人の地域における政治的中間層としての役割を示す可能性をもつものとしても注目される。(文責 菅原一)

国玉村に課せられた貸付金

江戸幕府の経済政策の一つに、いわゆる公金貸付政策がある。この貸付金の窓口となったのは遠国奉行や代官所といった各地の役所であった。本史料群の中には、甲府代官所・石和代官所取扱いの貸付金に関する史料が含まれており、両代官所における貸付の実態が垣間見える。

まず国玉村甚左衛門の借用状況について確認していきたい。時期は限られるが、万延元年 (1860) に金 25 両 (No.176-15-2)、文久 2 年 (1862) に金 60 両 (No.176-5、176-14)、翌年にも金 60 両 (No.176-16) を拝借していることが分かる。いずれも 5 年賦であったため、皆済しない内に次の貸付金を願うという状況であった。

どうして甚左衛門はそれほど頻繁に借金しなければいけなかったのか。その理由が窺える史料が「御金拝借証文」(No.73) である。(※関係史料あり。No. 138～139・142) 本史料は拝借を願い出る際に作成されたものと考えられるが、その中に「右者御用金之儀ニ御座候得者、年季明之節者勿論年季中返納被仰付候共、其段者不申立、元利相揃急度返納可仕候」(No.73-①) という一文が見られる。

貸付金と御用金とは性格が異なるものであり、どうして「御用金」と表現されているか釈然としないが、御用金には強制的に割り当てられた側面もあることから、こういった性格を指して右の拝借金を「御用金」と表現しているのではないかと考えられる。

以上のように国玉村住民に強制的に割り当てられた貸付金の利金は何に用途されたのだろうか。

石和代官所扱いの貸付金で確認できる名目は以下の通りである。「雹損御救御手当拝借金」(No.176-8-1)、「水難拝借」(No.176-8-2)、「松本村大蔵寺御宮修復料貸付」(No.176-12-2)、「板垣村善光寺貸附金」(No.176-13-4)、「大蔵寺御宮修復料貸附金」(No.176-22)、「荒地手当御貸附金」(No.176-24-1)。

甲府代官扱いの貸付金では「甲府宿駅御助成御貸付金」(No.73)とあり、甲州道中柳宿の助成に用いられていたことが分かる。

これらの貸付金が名目通りに使用されたのかは不明だが、他宿の例では貸付金の利金が宿総収入の40～60%前後を占めていたというデータもあり、国玉村に賦課された貸付金も周辺地域の救済費用に充てられていたと考えられるのである。(文責 佐藤友里)

明治6～7年の御用留について

国玉村文書の中で明治以降の史料として、戸長が各種布令を写筆した「御用留」と呼ばれる横帳がある。年代は、明治6(1873)年1～2月のもの(No.92)と、飛んで同年10月～明治7年4月のもの(No.11・36・94・133・220)がある。

当時の山梨県は、明治6年1月に土肥謙蔵(実匡)に代わって藤村紫朗が県令に就任し、権参事の富岡敬明とともに各種の近代化政策を推し進めていく時期である。遡って明治5年10月、行政単位としての区が設置され、その責任者として区長、そして区内各村の代表として戸長が選出され、翌年には区長総代理(区長の代表、県庁に詰める)が選出された。

この「御用留」に記載されている内容は、大きく二つに分類できる。第一は、「権令・権参事→区長総代理→各区長→各村」という下達経路を用いた県からの布達である。そのうち、「甲」「乙」または「番外」から始まるものは権令・権参事からの布達、「詰所」から始まるものは区長総代理からの布達である。

そして第二は、区内の回覧文書たる回章である。ここで、国玉村が所属する区がどこだったのかという点は少し複雑であるが、小学校創立に関する3つの事例から検討したい。①明治6年2月の創立戸掛金に関する回章は、「第二大区」の「学区取締」から、増坪・蓬沢・里吉・国玉・西高橋・七沢・上阿原・向の各村「小学校御世話方」に宛てる。②①と同月の建設費割振りに関するものは、「山梨郡第三区」西高橋村の副戸長が各村の副戸長に宛てる。③明治6年10月以降の回章には、「山梨郡第四区」の記載が一貫して見られる。まず①について、『山梨県史』によれば、山梨県では大区・小区制は敷かれなかったというが(通史編5、

2005年、15頁)、混用された時期があったのだろうか。次いで②③について、明治6年から同7年の間に山梨郡内区域の再編があつて、国玉村は第3区から第4区に移ったことが推定される。(この後、明治7～8年には村々の合併がある。例えば、国玉・里吉の両村は明治7年6月に国里村となり、さらに明治11年には西山梨郡に所属となる。)

明治初年、累年的に布達の量は増加していくが、それに伴い戸長の担う業務は多忙化していく。それゆえ、「御用留」の内容には省略や間違いも散見される(鈴木淳『維新の構想と展開』講談社学術文庫、2010年、88～95頁)。さらに精緻な検討を行うためには、新・旧『山梨県史』など他の史料との突合せを行っていくことが必要であろう。(文責 西山直志)

国玉村と品川台場 ―台場築造費上納の一事例―

本史料は、嘉永6(1853)年6月3日のペリー来航を受けて同年8月末に開始された品川台場の築造費上納に関するものである。年代は「卯二月」ゆえに安政2(1855)年2月のことであると想起され、国玉村からの上納金合計は金9両である。なお、国玉村文書の他の史料(No.10「入置申一札之事」安政2年8月)をみると、本史料記載の人物は名主甚左衛門、長百姓藤右衛門・金兵衛・安之丞・安次郎・惣兵衛、百姓代瀬兵衛・勝平、ほか本百姓14名の計22名による上納であることが分かる。差出人は石和代官の「森岡太郎」である(西沢淳男編『江戸幕府代官履歴辞典』岩田書院、2001年、547頁。森田岡太郎清行。嘉永4年から安政2年まで石和代官。当時の国玉村は石和代官所支配。)

ペリー退帆直後、幕府は江戸湾防備強化のため嘉永6年6月から7月にかけて海岸巡視を行い、江川英龍らによる防備構想が上申された。最も江戸に近い品川沖への台場築造が優先され、オランダの築城書や砲術書をもとに、1から11番までの台場築造が計画された(浅川道夫『お台場一品川台場の設計・構造・機能一』錦正社、2009年、55～61頁)。しかし実際に起工・完成したのは1～3、5、6番台場にとどまった(4・7番台場は起工したが途中で工事中止、8～11番台場は起工にも至らなかった)。

台場築造等の莫大な費用調達のため、幕府は嘉永6年8月20日に各代官を通じて全国の幕領に献金を命じた。原剛氏の研究によれば、これにより総額約964,000両と銀84枚もの上納金を得たとしている(原剛『幕末海防史の研究』名著出版、1988年、20～21頁)。安政2年段階では台場築造工事は行われていないが、本史料も上記の海防献金に関するものであるとみられる。安政4(1857)年の決算書での費用総額が約986,500両であった(品川区編『品川区史 通史編上巻』(品川区、1973年)1141～1146頁)ことから、そのほとんどが全国からの海防献金によって賄われたものといえるかもしれない(前掲『お台場一品川台場の設計・構造・機能一』68頁)。(文責 富井優)

国玉大明神について

No.178 は石和御役所宛の書付の下書きであり、差出は山梨郡国玉村二郎左衛門組頭惣代名主甚左衛門とほか2名、年代は西5月21日。（これのさらに下書きがNo.134と思われる。No.134の年代は西5月12日。）国玉村の百姓の二郎左衛門が、国玉大明神の神主である磯部隼人の屋敷添の桑木を勝手に伐り取っているのを隼人の下男が見つけた。だが取り調べようにも、二郎左衛門が行方不明になってしまった。そのためこれを訴え上げるというものである。この書付に出てくる国玉大明神について、詳しく述べていきたい。

国玉大明神こと玉諸神社は、現在も山梨県甲府市国玉町にある。玉諸神社は創設以来の社号であり、国玉社とは御神徳顕著により宮より奉られた尊号である。中世に至り大明神と改め、国玉大明神の名称は江戸時代まで使われた。祭神は大国魂神。甲斐国三宮。

永万元年（1165）6月の神祇官諸社年貢注文に「甲斐国国玉社」とあるが、古代から中世にかけての実態は由緒以外に見えず、はっきりとしない。天正10年（1582）3月武田氏滅亡の際、織田軍によって破壊・放火され衰退したが、本能寺の変後徳川家康が甲斐を領有すると徳川氏によって保護された。慶長8年（1603）櫻井安芸守・石原四郎右衛門・小田切大隅守・跡部九郎衛門の四奉行連署の黒印状により国玉村内に社領61石余と屋敷地1308坪が安堵され、慶長14年（1609）家康の命を受けた大久保石見守によって社殿は再建された。3代将軍徳川家光の時代に至り、寛永19年（1642）朱印状を賜って以後、社領は朱印地として幕末に至った。徳川家光・家綱・綱吉ら将軍の厄除けや誕生安全の祈祷、徳川忠長の武運長久の祈願、徳川綱豊の水泡平癒祈願などを行っており、徳川家と縁の深かったことが窺える。

ちなみに、村明細帳（No.135。年代不明）にも「御朱印／一、高六拾壺石三斗余／三宮国玉大明神領 神主 磯部隼人／御朱印／一、千三百八坪／神主 屋敷」と見られる。また、由緒から神主は代々磯部家が担っていることが分かる。

尚、国玉大明神関係ではほかに国玉大明神のお守りが、当文書群から出ている。（No.43、No.157）（文責 上條静香）

名字書出

No.107は「名字書出」と呼ばれる文書の一例である。縦31.6×横42.5cmの料紙を二つに折った折紙形式となっている。中央に諱「延應（応）」を大書し、両側に訓・音それぞれの読み「ノフマサ」「エンヲウ」を書いている。通常はこの右に苗字・通称を、左に年月日を書くが、ここでは日付を省き、左に苗字「鷹野」・通称「甚左衛門」・本姓「源性（姓）」を記す。その左には諱の考案者の名「磯部臣正親」がある。磯部正親（1826～1906）は代々国玉村の鎮守・国玉明神（現・玉諸神社）の神主を勤める地域の名士であり、また国学・和歌を修めた文化人でもあった。奥には和歌「天津神 ふかくめくみ之 名もたかく むね平らかに

まもらせたまへ」と、永い年月を意味する「千秋万々春」との文言を添えている。いずれも長寿を願うものである。

諱の右には「名乗事」、端には「土性」とある。江戸時代には命名指南書が多数出版されており（毛利貞斎『韻鏡袖中秘伝鈔』正徳5年〈1715〉刊等）、それによると、万物を5つの元素で説明する五行説に基づき、名前の文字にも五行が相応するという。「延」「應（応）」は音読みでア行とワ行から始まり、これらは喉音といい土性にあたるという。当人の生年月日などを勘案して、相性の良い五行になるよう選ぶことが望ましいとされた。国学者の本居宣長は中国由来の五行説による命名には批判的であったが（『玉勝間』十四の巻）、この命名法は盛んに用いられ、現代の姓名判断に通じている。

前近代、戸籍制度の確立する以前、人々は人生の節目に名を改め、生涯に複数の名を用いていた。七夜に幼名を付けられ、元服して成人名を名乗り、隠居して隠居名を称する。本資料は、目録中に頻出する国玉村名主・鷹野甚左衛門の元服に際して作成されたものであろう。上層農民には、公的な場での使用を制限されつつも苗字を称し、諱を持つ者もみられた。幕末の「甚左衛門」と、明治以降の「名主鷹野甚右衛門」（No.20等）・「鷹野福保」（No.98）が父子とすれば、鷹野家は「甚左（右）衛門」の通称を代々襲名する、この地域の名家であったと考えられる。（文責 林大樹）

3. 史料紹介「国玉村村明細帳」

【目録掲載情報】

目録表題：（甲斐国山梨郡国玉村明細帳）

年代：不明

作成・受取：不明

形態：縦冊

量：1点

備考：11丁目袋に状1点有り。「水損田畑八一前書上帳 山梨郡国玉村」

サブフォンド：01名主

シリーズ：07国玉村・村人関係

【史料概要】

甲斐国山梨郡国玉村（現山梨県甲府市国玉町）は濁川を挟み里吉村の東側に位置する。村の北を十郎川が西流し濁川に合流し、対岸には坂折村（現山梨県甲府市酒折）がある。貞享2年（1685）は村高781石とあり、濁川改修後の元禄14年（1701）は高798石余とある。享保9年（1724）から甲府藩領から幕府領となった。『甲斐国志』によれば、文化初年の家

数は 38、人数 151、村内にある三宮国玉明神の神主支配の社家 3、人数 19 とあり、天保 4 年（1833）の村明細帳（西山梨郡誌）によれば、家数 37、人数 164、他に神主 1 軒、社家 3 軒、寺 4 軒、寺社関係人数 14 とある。

国玉村は国府、山崎、松本三か村（いずれも現山梨県笛吹市）分内の河原から笛吹川の水を取り、和戸村（現山梨県甲府市）内柿木待・横根待から用水を引いていた。これにより、国玉村を堰の用水元とする 6 ヶ村組合が構成され、二つの待を維持・管理していた。さらに、村の近くを流れる濁川は 9 ヶ村組合、十郎川は 3 ヶ村組合の御普請所であったとされる。

本史料はその甲斐国山梨郡国玉村の村明細帳である。成立年代は不明であるが、史料中に「貞享二丑年甲府様御検地御奉行」の脇書に「百七拾壹年以前」とあることから、貞享 2 年（1685）から 171 年経た安政 3 年（1856）の成立と推測することができる。また、史料上に用水に関係する文言が多く登場するが、これは周囲を川に囲まれた国玉村の位置や、先にも述べた堰の用水元である村の性質を考えると頷けるだろう。国玉村を中心とする当該地域の姿を知る上で本史料は重要なものであり、ここに史料の全文を掲載する。

翻刻は石井秀和、菅原優香、須藤佑梨、山中雅人、油谷華織（五十音順、敬称略。）が担当し、内容確認・原稿作成・史料概要執筆は萱場真仁が担当した。

校訂は西村慎太郎が担当した。校訂に当たって読点を加えた。脇書等は「」で括り、校訂者の加えた文字には（ ）あるいは○を冠して本文と区別するようにした。（ ）は本文文字を註するのみに用い、○はそれ以外の説明を註するのみに用いた。合字は仮名に改め、旧字・異体字等は常用漢字に改めた。並列の語句については読みやすくするため中黒点を用いた。

【史料翻刻】

○表紙白紙

甲斐国山梨郡

国玉村

一、高八百七拾石七斗三升壹合

内七拾壹石八斗五升

無地高

一、有高七百九拾八石八斗八升壹合

（脇書）「百七拾壹年以前」

是ハ貞享二丑年甲府様御検地御奉行

遠藤治郎左衛門様

矢部弥左衛門様

畑壹町六反三畝貳拾六歩

堀田其之分

是者百七拾壹年以前丑年御検地之節、畑堀田有之分

御吟味之上、堀田共より御縄請仕御検地帳ニ御載御座候、

此訳

上畑七反五畝貳拾六歩 石盛十五

分米拾壺石三斗七升九合三勺

中畑八反四歩 石盛十三

分米拾石四斗壺升

下畑七畝廿六歩 石盛十一

分米八斗六升三合八勺

小以貳拾貳石六斗六升壺勺

畑貳反七畝拾壺歩

是者百七拾壹年以前丑年御検地之節、畑圭（ママ。畦カ）

有之候桑ヲ桑共与御縄請仕罷有候、

此訳

上畑四畝貳拾四歩 石盛十五

分米七斗貳升

中畑壹反九畝八歩 石盛十三

分米貳石五斗四合

下畑三畝九歩 石盛十一

分米三斗六升三合

小以三石五斗八升四合

田貳畝九歩 濁川瀬引

是者松平甲斐守様御領地之節、濁川通り瀬

廣ケ被遊候ニ付、畝引ニ御座候、

中田貳拾歩 石盛十八

分米壺斗貳升

下々田壺畝拾九歩 石盛九

分米壺斗八升六合

小以貳畝九歩

分米貳斗六升六合

畑五畝貳拾歩 濁川瀬引

右同断瀬廣ケ被遊候ニ付、畝引ニ御座候、

此訳

下畑壹畝貳拾歩	石盛十一
分米壹斗壹升七合	
下々畑四畝拾八歩	石盛七
分米三斗貳升貳合	

反別五拾町八反貳畝貳歩

田四拾壹町壹反四畝六歩

内 畑七町三反拾三歩

屋敷貳町三反七畝十三歩（脇書）「拾三歩」

此訳

上田拾貳町貳反五畝八歩	石盛十九
分米貳百三拾貳石八斗	
中田拾貳町四反五畝歩	石盛十八
分米貳百貳拾四石壹斗	
下田拾四町四反六畝貳拾九歩	石盛十四
分米貳百貳石五斗七升五合	
下々田壹町九反六畝貳拾九歩	石盛九
分米拾七石七斗貳升七合	
小以四拾壹町壹反四畝六歩	
分米六百七拾七石貳斗貳合	

上畑壹町四反貳畝歩	石盛十五
分米貳拾壹石三斗	
中畑四町七畝歩	石盛十三
分米五拾貳石九斗壹升	
下畑壹町五反六畝廿七歩	石盛十一
分米壹七石貳斗五升九合	
下々畑貳反四畝拾六歩	石盛七
分米壹石七斗壹升七合	
屋敷貳町三反七畝拾三歩	石盛十二
分米貳拾八石四斗九升貳合	
小以九町六反七畝貳拾六歩	
内七畝拾歩	郷藏屋鋪引

分米八斗八升

分米百貳拾壹石六斗七升八合

(脇書)「田畑共」

- 一、永引永荒場無御座候、
- 一、新田畑無御座候、
- 一、見附見取場無御座候、
- 一、金銀米錢何ニ而茂 (割書)「定納役・不定納役」納無御座候、

(脇書)「御朱印」

三ノ宮国玉大明神領

- 一、高六拾壹石三斗余

神主

磯部隼人

(脇書)「御朱印」

神主

- 一、千三百八坪

屋鋪

(脇書)「黒印」

山梨郡鎮目村禪宗保雲寺末寺

- 一、高三百坪

禪宗国玉山 能満寺

是ハ慶長八卯年御奉行様御證文御座候、高外御除地ニ御座候、

(脇書)「除地」

山梨郡山宮村禪宗青松院

- 一、屋敷六畝拾八歩

禪宗讃龍山 長泉寺

同郡同村同宗青松院末

- 一、屋敷壹畝拾貳歩

千手院

真言宗府中室藏院末

- 一、屋敷壹畝拾貳歩

真言宗龍宮山成福寺

是ハ百七拾壹年以前年貞享貳丑年甲府様御檢地之節、御水帳御戴除地被仰付候、

- 一、当村惣家数四拾三軒

此人数百六拾八人内 (割書)「男八拾四人・女八拾四人」

外ニ寺三ヶ寺 僧三人

神主

社家

番非人小屋

壹軒

人数三人内 (割書)「男壹人・女貳人」

一、当村前後左右（割書）「東西江七町貳拾間、上河原村境より里吉村境迄、
南北江九町四間、蓬澤村境より坂折村境迄」

一、当村田方之儀者壺面平地ニ御座候、土地者一面ニ不残赤真土右之場所ニ御座候、

一、畑方右同断ニ御座候、

一、当村用水之儀
笛吹川堰
入用水掛り高

高六百七拾七石貳斗三合

此反別四拾壺町壺反四畝六歩

一、当村用水之儀者笛吹川通万力筋国府村川原下松本村山崎村三ヶ村河原之内ニ而、古来より用水入口場能所より取来り申候、右堰筋之内御普請所之義川田村之内風呂前与申処ニ、先年甲府様御領地之節迄ハ年々人足・籠・諸色被下置候而メ切仕、用水引取申候所ニ、御国替被遊候以後松平甲斐守様御領地ニ罷成申候ニ付、段々奉願上候へ共、被仰付不下置候故無是悲、百姓役ニ仕用水引申候、入口之義ハ川原間之義ニ御座候得共、其以後茂段々満水ニ而メ切場所多ク罷成候ニ付、只今ニ至候而者人足・籠・諸色年々大方入用仕、惣百姓一同迷惑（見せ消）「難渋」仕候、其後宝暦年中より弘化元辰年（見せ消）「年中」迄者年々人足・諸色代被下置処、只今ニ至り候而者人足・諸色代不被下置、惣百姓一同当惑難渋仕候、尤ハ樋御普請之儀者古来より伏替御普請被仰付被下置候、

一、右用水之儀者六ヶ村組合ニ而当村方水元・水下組之義ハ向村・上阿原村・七澤・西高橋村右六ヶ村ニ而、高メ貳千八百石余之用水場ニ御座候、諸色・人足村々百姓自普請ニ仕申候ニ付、近来籠・諸色共高直ニ付、誠ニ難渋仕候、

一、天水場・溜井懸り無御座候、

一、当村水損場之儀、

拾五町九反拾五歩

此訳

田方拾五町壺畝壺歩

分米貳百三拾六石壺斗九升

畑方八反九畝拾四歩

分米九石貳斗壺升六合

右田畑之儀満水之節、向村・上河原村・（脇書）「七沢村」西高橋村地内土手切申候ハ、水損仕候場所ニ御座候、尤土手切不申候而も長雨仕候へ者濁川通満水仕、右田畑水損仕申候、

一、当村薪取場万力筋板垣村御林より落葉・下草等御運上札ニ而取来り申候、

- 一、当村草苅場無御座、
少し之畔草近々御座候而、惣百姓難儀仕候、
- 一、当村御年貢米壹俵三斗六升入ニ仕立御上納仕候、尤御延石・御置米（脇書）「御拝借」
被仰付、残米之分甲府統之村方ニ付、皆甲府詰被仰付来リ申候、
- 一、土橋三ヶ所（割書）「長九尺・横五尺」
- 一、土橋拾五ヶ所（割書）「長五尺・横壹尺」
- 一、当村分濁川ごみ川ニ而幅五間御座候、（脇書）「尤古来より」御普請所御座候、右川々
土橋与申橋是も御座候、是者川長当村之内北ハ坂折村境より南ハ蓬沢村境迄九町、戌
亥方甲府御城下より流、四拾丁程下ニ而落合村ニ而笛吹川江落合申候、舟往来ハ無御
座候、
- 一、当村川役・舟役・御林守・山守無御座候、
- 一、当村より柳町宿大通り之節、人馬増大助相勤候義、西御丸様御国替之節、府中柳町問
屋前より大助伝馬場之内申来、百石ニ付人足壹人・馬壹疋割付遣シ申候、其後大巡見
様御通行之砌、百石ニ付人足壹人宛割付遣シ相勤申候、
- 一、当村方之儀者皆本途御高免故、極而難儀之村方△実々難渋仕、心至而農業出精致漸々
御年貢御上納仕罷有候、△其余（脇書）「別而」稼方等何ニ而も無御座、営方ニ差支
当惑難渋仕候、尤違作仕候時々者夫喰代種粃等御拝借仕、取統罷在候、

4.一眼レフカメラによる 資料撮影の手引き

上條 静香

はじめに

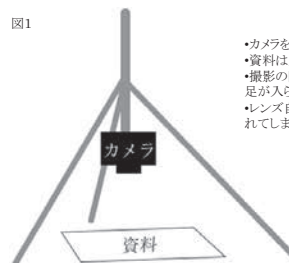
- このマニュアルはデジタル一眼レフカメラを使用している資料撮影を対象としている
- 作成にあたり、佐藤大介編・NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク発行「歴史資料保全活動におけるデジタルカメラによる文書資料撮影の手引き」を参考にさせていただいた
 - このマニュアルでは、資料の撮影で一眼レフカメラを使用する際の注意点等を中心にまとめている
 - そのため、資料の撮影方法の詳細は宮城資料ネットのマニュアルを参考にされたい

環境設定①～カメラの設置 I

- カメラの設置
 - 三脚を使う
 - 水準器を使って、カメラと撮影台が平行になるようにする
- 三脚の置き方
 - 基本的には逆付け(図1)
 - 資料のサイズが大きいものなどで逆付けだと全面が入らないとき(図2)

環境設定①～カメラの設置 II -逆付け

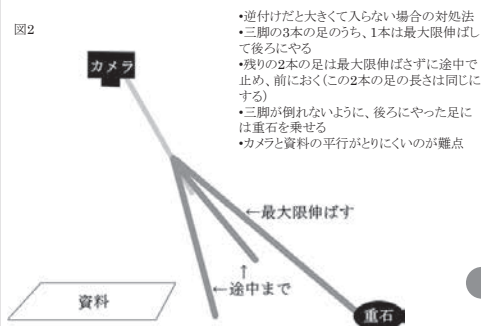
図1



- カメラを逆向きに設置
- 資料はカメラの下、三脚の足の合間に置く
- 撮影の際、ストロボで影が出たり、三脚の足が入らないように注意
- レンズ自身の重さでレンズが下へ繰り出されてしまうことがあるので注意

環境設定①～カメラの設置Ⅲ-大きいもの

図2



環境設定②～レンズ

- 使用するのは標準レンズ^{②③}が望ましい。
 - 広角レンズ^{②③}は歪曲しやすいため避けるべき
- ズームレンズ^{②③}は、広角側(焦点距離^{②④}が短い)ではなく、やや望遠側(焦点距離が長い、目安は50mm程度)を使って撮影することで、レンズの歪曲を減らす
- 三脚にカメラを下を向けて固定すると、レンズ自身の重さでレンズが下へ繰り出されてしまうことが考えられる
 - テープなどでレンズのズームを固定してしまうと良い

環境設定③～光源Ⅰ

- 左右からの光量を同じにすることを意識する
- 基本的にストロボを焚く
 - 部屋の色を資料に反映させないため
 - 影が入らないよう注意
特にズームレンズの場合、レンズの影が入りやすいので注意
- 金、写真、拓本はストロボ不可(反射してしまうため)
 その他ストロボを焚いたら反射してしまった場合
 →ストロボを焚かずに撮らなければならない
- ストロボを焚かずに、左右からの光量を同じにして撮影する方法
 - レフ板の利用(図3)
 - 蛍光灯の間を狙う(図4)

環境設定③～光源Ⅱ-ストロボを焚かない

- レフ板の利用

図3

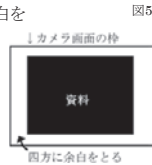
• レフ板^{②⑤}を立て、中心に資料を置くことで周囲からの光量を一定にする
 • レフ板は反射率が高いものを使用する
 • レフ板がない場合、段ボールなどに白い紙を貼って立てたものでも代用可
 • ブラインドがある場合、ブラインドを上に向け、天井に光を反射させると良い(ブラインドの下半分は黒い紙で覆い、余計な光が入らないようにする)
- 蛍光灯の間を狙う

図4

• 部屋や廊下などの蛍光灯を利用する
 • 蛍光灯と蛍光灯の間、丁度真ん中に資料を置いて撮影する(蛍光灯の明るさは同じ=左右からの光量が同じになるため)
 • 撮影の際、自分の影が入らないように注意

撮影の際の注意

- 歪みを防止するため、資料の周囲に余白を取って撮影する(図5)



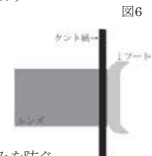
- ISO感度は200～400、絞り値F10を基準に設定する
 - 最初に何枚か撮って確認し、ISO感度、シャッタースピード、絞りなど適宜調整する
 - Ex.ぶれるようなら感度やシャッタースピードをあげる
- その後も必要に応じて適宜調整が求められる
- Ex.環境の変化...ストロボを焚く、焚かないノ量、光の向きが変わった

撮影にあたり、あると便利なもの

- 無反射ガラス
 - 反射光を拡散させ、反射や映り込みをおさえたガラス
 - 特に写真や絵を撮る際などに有効

- レリーズ
 - 三脚から手を離す際のブレを防ぐことができる

- ケント紙
 - ガラスなど写り込みしてしまう場合に、写り込みを防ぐ
 - 黒ケント紙にレンズの大ききの穴をあける→そこにレンズを通し、紙の上からレンズにフードを被せる→ケント紙の四隅を固定する(図6)
 - 反射しないもので、明るさをあげたいとき
 - 白ケント紙を使って先程と同様の方法をとる



リモート撮影のすすめ

- リモート撮影でできること
 - PCからシャッターを切る
 - カメラの設定(絞り、シャッタースピード、ISO感度、ホワイトバランス、ファイル形式など)の変更
 - PC画面でのライブビュー撮影
- リモート撮影した画像データは、自動的にPC内に保存される
 - 事前に保存先のフォルダを作成しておくとう便利
 - 念のため、カメラにも同じデータが記録されるように設定しておくことが推奨される

- 専用アプリケーション(例)
 - ニコン: Camera Control Pro 2
 - キヤノン: EOS Utility

リモート撮影の手順

- カメラとPCをUSBケーブルでつなぐ
- 専用アプリケーションを起動
- カメラの電源をONにする
- PC画面でライブビュー設定をONにする(図7)
- ライブビュー画面を確認する
- 資料が画面に収まっていることを確認し、ピントを合わせる(図8)
- シャッターボタンを押す(図7)

図7→



図8↓



※画像は全てEOS Utilityのもの

まとめ

- 撮影環境、撮影対象によってカメラの設定は異なってくる
 - ・ そのため統一的な基準を示すことは難しい
- ここで述べたのはあくまで1つの目安であり、必要に応じて適宜調整していくことが求められる
- ただし以下の2点はいかなる環境・対象でも必須条件となる
 - ・ カメラと撮影台の平行をとること
 - ・ ぶれないこと
- また、必須条件以外に心がけておきたいことは以下の通り
 - ・ 左右からの光量を一定にすること
 - ・ 余計な影やものが入らないようにすること

用語解説

- ・ ※1 標準レンズ...一般的に焦点距離が50mmのレンズ
- ・ ※2 広角レンズ...一般的に焦点距離が28mm以下のレンズ
- ・ ※3 ズームレンズ...一定の範囲内で焦点距離を変えことができ、写せる範囲を変えられることができるレンズ
- ・ ※4 焦点距離...ピントを合わせたときのレンズから撮像素子(イメージセンサー)までの距離。一般的に18mmや50mm、100mmなどといった数値で表される。焦点距離の短いレンズほど画角が広くなり、写る範囲が広がる。焦点距離の長いレンズほど画角が狭くなり、被写体が大きくなる。
- ・ ※5 レフ板...撮影の被写体に光をあてるための反射板。白や銀色などの種類があり、必要な光量に応じて使い分けができるように表裏でセットになっているものも多い
- ・ ※6 レリーズ...カメラのシャッターボタンに取りつけ、カメラから離れた位置からシャッターを押せるようにする道具

甲斐国山梨郡国玉村文書目録

01 鷹野家 / 01 質地・借金								
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	量	備考
153			金子借用手形之事（金6両借用に付）	文久3亥年7月	八代郡夏目原村借用人小沢平次右衛門（印）→山梨郡国玉村甚左衛門殿・藤右衛門殿	状	1	
19			入置申対談書之事（屋敷地3畝25歩鎌吉分ほか譲渡に付）	文久4子年3月日	国玉村談請人談吉（印）ほか3名→国玉村甚左衛門殿	状	1	
83			續（ママ）渡申田畑證文之事（上田1反6畝1歩ほか4反4畝5分）	慶応3年卯6月日	山梨郡国玉村續主善右衛門同郡同村親類證人良兵衛→忠兵衛との	状	1	
14			御対談一札之事（預り金25両利足月2割5分返済の砌勘定に付）	明治4年辛未7月日	山梨郡国玉村預り人鷹野甚右衛門（印）→蓬沢村小野九兵衛殿	状	1	
113			質渡申田地之事（上田2反4畝16歩分要用金差詰に付質地、30両）	明治4年辛未7月日	国玉村質主鷹野甚右衛門（印）他2名→甲府西青沼町平原五兵衛殿	状	1	裏書（明治4辛未年7月日、山梨郡国玉村長百姓武井安右衛門（印））
52			乍恐以書付奉歎願候（当村金兵衛拝借金を甚左衛門ほか1人引き請け29日まで猶予願うに付）	未2月22日	国玉村長百姓安兵衛代兼長百姓甚左衛門→石和御役所	状	1	
12			覚（20両2分他べ金42両2朱263文金銭書上）	正月13日	喜兵衛 [印] →国玉村甚左衛門殿	状	1	
177			（書状、初めの一時期借用仕りたく、値段は仕切りを差し上げるに付）	11月2日	相生町鈴木久兵衛拝→国玉村鷹野様	状	1	
170			（書状、国玉村地所私方へ差上の処、当25日引取限に付承知の旨）	12月11日	石原陳平拝→小澤様尊下	状	1	
96			乍恐以書付奉願上候（早稲反別凡10町歩、内反別1町歩に付）	-	-	状	1	後欠
143			（反別合8反6畝12歩、質入値段9両1分書上）	-	-	状	1	

01 鷹野家 / 02 信仰・文化								
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	量	備考
98			地鎮銘之写（櫻井政能顕彰碑文カ）	元文戊午(3年)7月	斎藤六左衛門藤正辰	状	1	写、奥書「甲斐国山梨郡国玉郷鷹野福保写之、天朔（ママ）料二付爰、慶応四辰季八月吉祥日」
82			院号料請取手形之事（院号居士大姉戒名甲金20両にて受取るに付）	天保4年巳11月	山梨郡国玉村能満寺住持萬国→甲府門町二丁目大黒屋喜八殿	状	1	
109			（書、「池頭下出花飛編…」）	乙卯仲冬	書 四信 [印]	まくり	1	後欠
107			（諱延応書出）	-	磯部臣正親考	状	1	
157			国玉社御守護（御札）	-	-	守	1	開被不能
182			（賀詞「龍ハ富士をたやすくこゑる…」）	-	-	状	1	まくり、半紙
183			（和歌「当年のすえを目出度大日侍…」）	-	-	状	1	まくり、半紙
184			（二行書「百歳光陰一場夢…」）	-	雪嶋田信 [印] [印]	状	1	まくり、半折
229			（水墨画・竹の図）	-	雪江花押	状	1	まくり
248			（天照皇太神他神号書上）	-	蛭鳴舎老人 謹書 [印]	まくり	1	
4			（神名号、「欽請応神天皇八幡大神」）	-	-	まくり	1	
43			国宝宮疾病除御守護（御札）	-	-	状	1	木版
167			（和歌、鷹野氏御日待を賀而）	-	-	状	1	
168			（和歌、鷹野氏の賀に）	-	-	まくり	1	
169			（書、「閑為水竹雲山主…」）	-	香嶋森田信青 [印]	まくり	1	括り紐有

01 鷹野家 / 03 土地								
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	量	備考
22			(385 坪ほか土地絵図)	-	-	舗	1	周囲に長泉寺・定七・兵左衛門らの土地
57			(図面、土地寸法カ)	-	-	状	1	

01 鷹野家 / 04 金銭受取								
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	量	備考
79			預り金之事 (西高橋村十左衛門殿米穀買入方手当金 156 両)	寅8月日	国玉村預り人瀬平・金兵衛・藤左衛門・勝平・安之丞・甚左衛門	状	1	
39			覚 (大 2 ヲ 1 貫 300 文他 金 2 朱銭 2 貫 544 文)	7月	日向屋佐右衛門→国玉村甚左衛門様	状	1	端裏「午未兩年一四口合 金式兩壹分ト貳百八十九文」
38			覚 (唐紋 1 ケ 金 1 朱他 金 1 分文銀 1 匁 5 分銀 48 匁 4 分 3 厘銭 2 貫 832 文金銭書上)	9月5日	日向屋佐右衛門→国玉村甚左衛門様	状	1	
40			覚 (毛ぬき 1 つ 272 文他金銭書上)	11月	日向屋佐右衛門→国玉村甚左衛門様	状	1	
41			覚 (仕切判 1 金 2 朱他金銭書上)	-	日向佐→国玉村甚左衛門様	状	1	
158			覚 (金 4 両 3 分 3 朱 1 匁 6 分内金 2 両受取)	-	-	状	1	
163			当用相場割口伝之事 (割方他問答書付)	-	-	状	1	

01 鷹野家 / 05 水車								
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	量	備考
71			売渡申水車之事 (水車 1 輪代 金文金 2 両 2 分)	元治2丑年2月21日	山梨郡川田村売渡人市左衛門 (印) 証人惣右衛門 (印) →国玉村甚左衛門殿藤左衛門殿	状	1	

01 鷹野家 / 06 本宅普請								
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	量	備考
160			本宅普請目論見帳	文久2壬戌年正月吉祥日	-	竪	1	裏書「甲斐国山梨郡国玉村鷹野家作事」

01 鷹野家 / 07 その他								
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	量	備考
75			(包紙、白紙)	-	-	包紙	1	
89			御スガリ玉 (包紙カ)	-	己代太	状	1	
93			(ヒモ)	-	-	紐	1	
103			書付壺通 (包紙)	-	-	包紙	1	
112			(白紙)	-	-	状	1	
130			(包紙)	-	-	包紙	1	括り紐とも
234			(白紙)	-	-	状	1	

02 名主 / 01 年貢・村入用								
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	量	備考
86			村夫入用帳	嘉永7寅年8月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
1			御城米御上納揃帳	嘉永7寅年10月吉日	山梨郡国玉村名主甚左衛門	横	1	
204			当寅御年貢差引帳	嘉永7年11月日	山梨郡国玉村名主甚左衛門	横	1	
207			当寅御年貢勘定帳	嘉永7年11月日	山梨郡国玉村名主甚左衛門	横	1	
206			当寅冬夫銭割帳	嘉永7年12月	山梨郡国玉村名主甚左衛門	横	1	
117			卯春定式御普請御仕様帳	安政2年卯2月日	国玉村外五ヶ村組合	竪	1	

195		国恩冥加金上納受取帳	安政2年卯2月日	山梨郡国玉村名主甚左衛門	横	1	
187		寅年御延石小前書上帳	安政2年卯3月日	山梨郡国玉村名主甚左衛門(印) 他2名→石和御役所	横	1	
209		当卯夏夫錢掛帳	安政2年卯7月	国玉村名主甚左衛門	横	1	
235		当卯夏夫錢割帳	安政2年卯7月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
210		当卯御年貢大小切割紙帳	安政2年8月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
84		当卯御年貢請取帳	安政2年8月吉日	山梨郡国玉村名主甚左衛門	横	1	裏表紙に「越石分」とあり
192		御城米御上納請印帳	安政2年10月吉日	山梨郡国玉村名主甚左衛門	横	1	
118		当卯御年貢勘定帳	安政2年11月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	挟み込み状有。(奎兵衛分田畑書上)
111		当卯田夫錢割掛ヶ帳	安政2年11月日	国玉村名主甚右衛門	横	1	
196		当卯冬夫錢掛ヶ帳	安政2年11月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
197		当卯冬夫錢割帳	安政2年11月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
203		当卯御年貢差引帳	安政2年12月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
228		当辰夏夫錢掛ヶ帳	安政3年辰7月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	裏表紙に「辰夏」とあり
215		嘉永7寅年安政二卯年両年御年貢勘定帳	安政5年7月日	国玉村長百姓甚左衛門	横	1	
33		貯方喰小前書上帳	安政6年2月日	山梨郡国玉村名主藤右衛門(印) ほか2名→石和御役所	横	1	
48		未御年貢納通(包紙カ)	安政6年9月日	国玉村名主甚左衛門	状	1	「議定書入」とも書き入れあり。
244		当未田方内見合附帳	安政6年9月	山梨県国玉村名主甚左衛門(印) 他6名→石和御役所	横	1	
191		御検見諸入用帳	安政6己未年10月吉日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
241		水難田方御取箇仕訳帳	安政6未年10月日	国玉村名主甚左衛門(印) 他48名	横	1	
251		御城米上納随帳	安政6己未年10月吉日	山梨郡国玉村名主甚左衛門	横	1	
240		未御年貢米初上納仕訳帳	安政6年11月日	山梨郡国玉村名主甚左衛門	横	1	
238		当未御年貢差引帳	安政6年12月日	山梨郡国玉村名主甚左衛門	横	1	
205		土橋御普請諸入用帳	安政7庚申年2月吉日	山梨郡国玉村名主所	横	1	こより紐に結び付文書あり(現状破壊の恐れがあるため開かず)
68		議定書之事(年貢皆済目録突合方ほか当村方一件、双方掛合に及び議定取り極めに付)	安政7申年間3月	山梨郡向村名主九兵衛ほか10人外小前36人	状	1	
61		乍恐以書付御利解下奉願上候(水帳取扱方掛合の件、内済に付)	万延元申年間3月	当御代官所甲州山梨郡向村百姓代嘉右衛門ほか27人都合28人惣代嘉右衛門(印) 他17人→石和御役所	状	1	
65		乍恐以書付御吟味下奉願上候(百姓代嘉右衛門ほか28名より村役人へかかる水帳や10ヶ年以來目録勘定などに関する出訴一件に付)	万延元年間3月	山梨郡向村名主九兵衛ほか9名→石和御役所	状	1	
200		当申夏夫錢掛ヶ帳	万延元年7月日	山梨郡国玉村名主甚左衛門	横	1	
231		当申夏夫錢割帳	万延元年7月日	山梨郡国玉村名主甚左衛門	横	1	
198		当亥田方内見合附帳	文久3亥年9月日	山梨郡国玉村	横	1	

25		当亥御年貢勘定目録	文久3亥年10月8日	国玉村名主甚左衛門他 7 名	状	1	
212		当亥御年貢勘定帳	文久3年11月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
95		当亥御年貢差引帳	文久3年12月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
120		臨時入用帳	文久3年亥年12月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
211		当亥冬夫錢臨時田夫掛ヶ帳	文久3年12月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
225		当亥冬臨時割帳	文久3年12月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
144		亥御年貢皆済目録 (国玉村米 150 石 1 斗 6416 石、永 182 貫 297 文 9 分 7 毛)	元治元子4月	増 安兵衛→右村名主・長百姓・百姓代	状	1	端裏「甲州山梨郡国玉村」
224		当子夏臨時割合帳	元治元年7月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
226		当子夏夫錢臨時掛ヶ帳	元治元年7月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
247		文久三亥年御年貢浚勘定帳	元治元子年9月日	国玉村長百姓甚左衛門	横	1	
189		安政六未年御年貢浚勘定帳	慶応元丑年12月日	国玉村長百姓甚左衛門	横	1	
194		当寅御検見諸入用帳	慶応2年8月吉日	山梨郡国玉村名主甚左衛門	横	1	
254		当寅冬臨時入用帳	慶応2年8月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
237		当寅田方内見合附帳	慶応2年9月日	山梨郡国玉村名主甚左衛門 (印) 他 5 名→石和御役所	横	1	
188		風水難田方御取箇仕訳帳	慶応2寅年10月日	山梨郡国玉村名主甚左衛門 (印) 他 53 名	横	1	
31		御城米出仕割賦請印帳	慶応2寅年11月吉日	国玉村名主甚左衛門	横	1	くくり紐とも
236		当寅御年貢勘定帳	慶応2年11月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
213		当寅御年貢差引帳	慶応2年12月吉日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
148		御定免御請証文	慶応2寅年	山梨郡国玉村名主甚左衛門他 9 名→石和御役所	竖	1	
239		当卯夏夫錢臨時掛ヶ帳	慶応3年7月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
250		当卯夏臨時割合帳	慶応3年7月日	国玉村名主甚左衛門	横	1	
21		(延石置米割賦帳 綴)	(明治2年～3年)	-	綴	1	
21	①	去巳御延石置米割賦并出金方取立帳	明治3年庚午8月日	国玉村名主甚右衛門	横	1	
21	②	御延石置米割賦帳	明治2巳年12月日	国玉村名主理右衛門 (印) (国玉名主所)	横	1	
180		御城米取究割附扣帳	明治3年辛未正月日	名主鷹野甚右衛門	横	1	
123		向村字中へ嶋御普請弁金破紙袋	(ママ、明) 治3年午8月	同名主甚右衛門	袋	1	もともとは「家秘清浄製青山」の茶袋。(裏面印「甲府一蓮寺町 諸国御茶自製所河内屋太兵衛」)
223		村入用夫錢帳	明治3年午8月朔日	-	横	1	
47		行倒臨時儲諸入用	明治3年庚午9月8日	-	横	1	
63		当午田方御検見諸入用帳	明治3年庚午9月吉祥日	国玉村名主甚右衛門	横	1	
221		(当午大切・小切金取立帳綴)	(明治3年)	-	綴	1	
221	①	当午大切金取立帳	明治3年10月日	山梨郡国玉村名主甚右衛門	横	1	
221	②	当午小切金取立帳	明治3年9月日	国玉村名主甚右衛門	横	1	

232		御城米出辻請印帳	明治3季庚午 11月日	名主鷹野甚右衛門	横	1	
246		当午御年貢勘定帳	明治3年庚午 11月吉日	名主鷹野甚右衛門	横	1	
20		当午延石置米貸渡請印帳	明治3年庚午 12月日	名主鷹野甚右衛門	横	1	
62		村入用夫銭帳	明治3年庚午 12月日	国玉村名主鷹野甚左衛門	横	1	
190		御結（マツ詰）米覚	明治3年庚午 12月日	名主鷹野甚右衛門	横半	1	
201		同役出給并人足扣帳	明治3年癸午 12月日	国玉村名主鷹野甚右衛門	横	1	
252		当午冬夫銭田夫銭掛ヶ帳	明治3庚午年 12月日	国玉村名主鷹野甚右衛門	横	1	
253		当午冬夫銭割帳	明治3年庚午 12月日	国玉村名主鷹野甚右衛門	横	1	
245		当午御年貢差引帳	明治3年12月	国玉村名主鷹野甚右衛門	横	1	
50		亥年御置米渡し方扣帳	明治4年辛未2 月日	-	横	1	
145		議倉穀石代割賦帳	明治4年辛未2 月日	名主鷹野甚右衛門	竖	1	
243		御高札健替諸入用帳	明治4年辛未2 月日	国玉村名主鷹野甚右衛門	横	1	状がくくり紐に1点結びつけてある
217		去年御年貢未進取立帳	明治4季未3月 日	国玉村名主鷹野甚右衛門	横	1	
222		午村入用夫銭帳	明治4年未3月	山梨郡国玉村名主鷹野甚右衛門（印）他2名→甲府御役所	横	1	奥書（壬申3月22日、山梨県（印））
91		前納證文之事（金札拾五兩当 未年御年貢大小切書面の通受 取に付）	明治4年辛未6 月日	山梨郡国玉村名主鷹野勘左衛門（印）他2名→甲府八日町市川久兵衛殿	状	1	包紙入、表「前納證文 壱通名主鷹野甚左衛門」
208		村入用夫銭同役出給人足帳	明治4年辛未7 月	名主鷹野甚右衛門	横	1	
90		前納申證文之事（当未御年貢 大小切へ引当受取に付）	明治4年辛未7 月日	山梨郡国玉村百姓代落合伝吉（印）他2名→甲府城屋町たみ屋弥兵衛殿	状	1	包紙入、表「未冬通り 證文前納證文壱通国玉村」
199		未夏夫銭割掛ヶ帳	明治4年7月日	国玉村名主鷹野甚右衛門	横	1	
249		未夏夫銭差引帳	明治4季辛未7 月日	国玉村名主鷹野甚右衛門	横	1	
227		当未夏夫銭割帳	明治4年辛未7 月日	国玉村名主鷹野甚右衛門	横	1	
186		明治3庚午御年貢勘定掛帳	明治5年壬申3 月日	名主節 鷹野甚左衛門掛り	横	1	
216		巳午両年引払決算取立帳	明治5季壬申3 月日	名主掛り市川藤右衛門・鷹野甚右衛門	横	1	
202		当戌御年貢勘定帳	明治7歳12月 日	山梨郡第四区国里村	横	1	
128		覚（金7両御用金に差し加え られたきに付）	丑10月22日	右貳拾貳人惣代長百姓金兵衛他2名→石和御役所	状	1	
131		乍恐以書付奉願上候（当村早 稲作1町5反歩刈り取りたきに 付）	寅8月22日	国玉村名主甚左衛門（印）・長百姓藤右衛門（印）・百姓代善兵衛（印）→石和御役所	状	1	下書カ
152		乍恐以書付奉願上候（風水災 のため当寅御検見入仰せ付け られたきに付）	寅8月22日	山梨郡国玉村名主甚左衛門他2名→石和御役所	状	1	下書カ
76		乍恐以書付奉願上候（国玉村 御延石15石、御置米15石ほ かに付）	寅9月2日	国玉村名主甚左衛門（印）ほか2名→石和御役所	状	1	
114		覚（品川沖へ御台場御取建入 用上納に付）	卯2月	森甚太郎（印）	状	1	端裏書「国玉村」
78		当卯御年貢勘定目録（国玉村 納合米147石2斗4升永156 貫856文9分）	卯11月17日	-	状	1	
161		乍恐以書付奉願上候（早稲2 町歩刈り取りたきに付）	未9月10日	右国玉村役人惣代名主甚左衛門他2名→石和御役所	状	1	貼り紙有

81		(甲府御詰米、明後 25 日納めるところ差し支えあり、追って沙汰に付)	11月23日	御役所 (石和) →国玉村	封紙	1	包紙入り、「差紙」、包紙朱書「急」
32		(御米 3 俵善右衛門ほか 108 俵城米書上)	11月24日改	-	状	1	
15		議定書之事 (村入用夫銭の儀)	-	-	堅	1	
18		寅御城米帳	-	-	ひも	1	
37		乍恐以書付御吟味下奉願上候 (向村嘉右衛門他より村役人へ相掛る御水帳并に御目録勘定等閑の儀に付)	-	-	状	1	
80		乍恐以書付御吟味下奉願上候 (御目録突合勘定等閑の段出訴一件に付)	-	-	状	1	下書カ
104		当寅御年貢勘定目録 (国玉村)	-	-	状	1	
106		(金 126 両 1 分 1 朱、銀 1 匁 3 分厘金書上)	-	-	横	1	年貢及び小作金の書上カ
108		当午御年貢勘定目録 (国玉村)	-	-	状	1	
129		乍恐以書付奉願上候 (去 - 巳年御普請帳面他金兵衛諸勘定御吟味下されたきに付)	-	-	状	1	国玉村、松本村
151		当年御年貢勘定目録 (国玉村)	-	-	状	1	二箇所 (「米壺石五斗九升七合八勺」と「米九拾七石八斗貳升五合四勺」の部分) に修正の貼紙有
179		乍恐以書付奉願上候 (高 870 石 7 斗 3 升 1 合免状)	-	-	状	1	しわ、表題と内容相違、下書反古カ
214		覚 (辰 2 月から 12 月までの 6 高 73 匁 5 分 7 厘 5 毛など書上)	-	-	状	1	
218		(金銭書上帳綴)	-	-	綴	1	
218	①	(永 149 文 9 分助三郎他金銭書上)	-	-	横	1	
218	②	(永 94 文 3 分柳造他合 38 匁 1 分 1 厘金銭書上)	-	-	横	1	

02 名主 / 02 領主からの手当・貸付								
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	量	備考
155			救粉金請取證文書上帳 (12 月 4 日大地震困窮人拝借に付)	安政元年12月日	国玉村名主甚左衛門・長百姓藤右衛門他 6 名→石和御役所	堅	1	各頁下部或は上部に折れ有
56			水損拝借金小前書上帳	安政2年卯5月日	山梨郡国玉村	堅	1	
115			(電損拝借金関係)	(安政2年)	-	綴	1	1 枚に別の文書が記されていたので、①・②とする。端裏「水損願書 写 名主甚左衛門」
115	①		乍恐以書付奉願上候 (電損御救御手当として金 500 両仰せ付けられたきに付)	安政2卯年8月日	上栗原村他 12 村→石和御役所	状	1	
115	②		乍恐以書付奉願上候 (下栗原村外 13 ヶ村電損難渋のため金 365 両御拝借のため書面の通り御貸渡しに付)	(安政2年)卯9月29日	下栗原村名主管 (ママ) 部左衛門他 12 名→石和御役所	状	1	
171			電積御救御手当金拝備 (ママ、借) 證文	安政2卯年9月	甲州山梨郡国玉村名主甚左衛門他 2 名→清水孫次郎様石和御役所	堅	1	
73			御金拝借證文 (質地証文雛形)	安政5年午12月	森田国太郎御代官所甲州山梨郡国玉村長百姓拝借人安次郎	綴	1	別に綴の細目録あり、内容が分かれているため枝番号として目録化する
73	①		差上申拝借證文之事 (甲府宿駅御助成御貸附金 50 両)	安政5年12月	清水孫次郎御代官所山梨郡国玉村長百姓拝借人何兵衛他 3 名→甲府御役所	堅	1	

73	②		差上申質地證文之事（雛形）	安政5年午12月	清水孫次郎御代官所山梨郡国玉村長百姓拝借人何兵衛他4名→甲府御役所	豎	1	
73	③		名寄帳小捨書拔（雛形）	安政5年午12月	清水孫次郎御代官所山梨郡国玉村長百姓拝借人何兵衛他5名→甲府御役所	豎	1	
73	④		覚（村方質入値段書上雛形）	安政5年午12月	清水孫次郎御代官所山梨郡国玉村長百姓拝借人何兵衛他6名→甲府御役所	状	1	
2			乍恐以書付御利害下奉願上候（巳年水難御救御手当金割渡延引取調の処、内済に付）	文久元酉年5月	当元御代官所山梨郡向村名主元助ほか4名→石和御役所	状	1	
27			乍恐以書付御利解下奉願上候（水難御救御手当金割合方延引一件内済に付）	文久元酉年5月	当元御代官所山梨郡向村名主元助他4名→石和御役所	状	1	立会人国玉村名主甚左衛門
99			御金拝借證文（御貸附金60両拝借に付）	文久元酉年12月	内海多次郎支配所国玉村長百姓拝借人甚左衛門他3人→甲府御役所	豎	1	
176	5		覚（拝借元高金60両初年当戌納之分金18両請取に付）	文久2年戌12月14日納	甲府御貸附 御役所（印）→内海多次郎支配所山梨郡国玉村甚左衛門納	状	1	包紙「文久2戌年十二月十一日納、甲府御貸附請取書宅通国玉村甚左衛門」
176	1		甲府柳町助成御貸附金返納方儀定帳	文久3亥年9月日	-	横	1	176-1～176-25まで袋一括。袋上書「甲府御貸附拝借 石和御役所拝借・御返納受取入」裏書「甲府御貸附金・石和御役所御貸附・両御返納書入」
176	15	3止	覚（拝借元高金60両式ヶ年目当亥納方金16両3分永50文請取書）	文久3年亥12月12日	甲府御貸附御役所（印）→増田安兵衛支配所山梨郡国玉村甚左衛門納	状	1	
176	15	2	覚（拝借元高金25両四ヶ年目当亥納方金4両1分請取書）	文久3年亥12月	甲府御貸附御役所（印）→増田安兵衛支配所山梨郡国玉村安次郎納	状	1	
176	14	1	覚（金15両2分永100文拝借元高金60両三ヶ年返納金請取）	元治元年子正月	甲府御貸附御役所（印）→山梨郡国玉村甚左衛門納	状	1	巻き込み、外→内
119			甲府拝借返納金二付雑用割合帳	元治元年子7月日	-	横	1	
176	14	2止	覚（拝借元高金60両四ヶ年目当丑納分金14両1分永150文請取）	慶応元年丑12月9日	甲府御貸付御役所（印）→山梨郡国玉村甚左衛門納	状	1	
176	16		覚（拝借元高金60両四ヶ年目金14両1分永150文受取）	慶応2年寅12月24日	甲府御貸附御役所→増田安兵衛支配所山梨郡国玉村藤右衛門納外三人	状	1	
176	17	1	覚（金12両御貸附金亥年分請取につき）	子4月15日	甲府御貸附御役所→国玉村甚左衛門・藤右衛門納	状	1	
176	17	2止	覚（ \times 32両5分御貸附金去亥年分月延利請取につき）	子4月15日	甲府御貸附御役所→国玉村甚左衛門・藤右衛門納	状	1	
176	24	1	荒地手当御貸附金返納受取（金2両1分、永225文）	丑正月29日	増田安兵衛手代桑山圭助（印）他2名→山梨郡国玉村拝借人甚左衛門	状	1	176-24-2を巻き込み、外→内
176	15	1	覚（金10両2分永100文他御貸附金請取）	丑正月晦日	甲府御貸付御役所（印）→山梨郡国玉村甚左衛門納	状	1	15-1から15-3止。外→内
176	19		覚（高金50両の内金10両永41文3分御進発御用途請取に付）	寅11月	増 安兵衛（印）→国玉村長百姓安之丞外式給人納	状	1	
176	4	2	陣内囲初詰戻請取（初18俵国玉村納）	寅12月8日	増田安兵衛役所 桑山圭助（印）・浅尾信十郎（印）	状	1	4-1に巻き込み
176	13	1	覚（金2分、地震潰家お救として請取）	寅12月16日	森田岡太郎役所 木村弘太郎[印]他2名→国玉村名主甚左衛門	状	1	包紙共、表「卯御年貢米御通国玉村」裏「寅小切手国玉村名主甚左衛門」巻き込み。外→内
176	20		覚（金5両御貸附金請取に付）	寅12月21日	甲府御貸附御役所（印）→国玉村甚左衛門納	状	1	

176	13	2	覚 (金 1 両 1 分貸附寅返納金受取)	寅12月27日	森田岡太郎手附木村弘太郎 [印] 他 2 名→国玉村納人甚左衛門	状	1	
176	13	3	覚 (金 1 両 2 分永 211 文 5 分貸附寅返納金受取)	卯2月20日	森田岡太郎手附木村弘太郎 [印] 他 2 名→国玉村納人安之丞	状	1	
165			乍恐以書付御歎願奉申上候 (去月 26 日大水解のため諸作皆損、急場御救い御拝借仰せ付けられたきに付)	卯5月3日	山梨郡鎮目村名主太郎兵衛他 26 名→石和御役所	状	1	端裏書「雹損御願書写名主甚左衛門」
176	4	1	覚 (金 1 分ト甲 1 匁 来辰年御穀代見廻り料とも他寺納)	卯6月13日	明暗寺用役桑原市郎兵衛→国玉村御役人中	状	1	4-2 を巻き込んでいる
176	13	4 止	(元利金 2 両 3 分永 42 文 3 分、板垣村善光寺貸附金返納金として請取)	辰4月6日	清水孫次郎手代広田清吉 (印) 他 2 名→国玉村甚左衛門	状	1	
176	7		助成金拝備 (ママ、借) 金年賦請取通 (助成金拝借金五ヶ年賦割に付)	(午年)	請取上納人二郎左衛門→納人甚左衛門殿	状	1	176-8 を巻き込んでいた。外→内。奥書として元利金 5 両請取の旨有
176	8	2 止	(水難拝借午より戌迄返納金 5 両受取)	申2月16日	清水孫次郎手附 鯉江幸蔵 (印) 他 2 人→国玉村	状	1	
176	8	1	覚 (雹損御救御手当拝借返納金 4 両 1 分銭永 150 文受取)	申3月27日	清水孫次郎手附 鯉江幸蔵 (印) 他 2 人→山梨郡国玉村	状	1	176-8-2 を巻き込んでいた。
176	21	1	(元金 1 両 2 分、永 100 文に付、延利永 13 文 3 分請取)	西正月25日	清水孫次郎手附鯉江幸蔵 (印) 他 2 名→国玉村甚左衛門	状	1	巻き込み外→内、176-21-1 ~ 2 止
176	21	2 止	(新御貸附拝借金 1 両 2 分永 100 文に付、利金 2 分請取)	西正月25日	清水孫次郎手附鯉江幸蔵 (印) 他 2 名→国玉村甚左衛門	状	1	
60			向村水難御下ケ金件御利害下 (水難御救御手当延引の儀に付)	西5月17日	山梨郡向村名主元助他 4 名→石和御役所	豎	1	
55			乍恐以書付御利害下奉願上候 (水難御救御手当延引の儀内済に付)	西5月22日	山梨郡向村願方名主元助他 5 名→石和御役所	状	1	
176	18	2	教諭別御貸附金返納受取 (金 3 両 3 分永 170 文)	西6月2日	佐藤広十郎他 2 名 (印) →国玉村藤右衛門納	状	1	
176	18	3 止	教諭別御貸附金返納受取 (金 2 両 2 分永 100 文)	西6月2日	佐藤広十郎他 2 名 (印) →国玉村武七郎納	状	1	
176	10		覚 (酉年分助成金甲銀 170 匁 3 分 9 厘請取)	西12月9日	二郎左衛門 (印) →甚左衛門殿	状	1	綴痕有
138			差出申質地證文之事 (反別合 8 反 6 畝 12 歩御用金拝借に付)	酉12月	内海多治郎支配所国玉村長百姓拝借人甚左衛門他 3 名→甲府御役所	状	1	奥に「三」と有。写カ
176	12	1	覚 (延利 49 文 2 分請取)	戌4月5日	内海多次郎御手附多久禮左衛門 (印) →国玉村甚左衛門納	状	1	1 ~ 2 巻き込み。外→内
176	12	2	覚 (松本村大蔵寺御宮修復料貸附返納分元金 1 両 2 分永 100 文、利金 1 分永 90 文請取)	戌4月5日	内海多次郎手代多久禮左衛門 (印) 他 1 名→国玉村甚左衛門	状	1	
176	6	1	(書状、金子 4 両この者へ御遣し下されたきに付)	戌12月6日	島上さとや二而二郎左衛門→柳多や様二而国玉村甚左衛門殿	状	1	
176	6	2	覚 (戌年分金 4 両助成金請取に付)	戌12月6日	国玉村二郎左衛門 (印) →同所甚左衛門殿	状	1	6-1 に 6-2 が巻き込まれている
176	9		覚 (金 12 両 御貸附金上納請取)	戌12月11日	御貸附御役所 (印) →国玉村甚左衛門納	状	1	
176	25止		(皆済金等閑の至りにより尋ね有るに付呼出状)	亥12月15日	石和御役所 (印) →国玉村役人	状	1	包紙共、上書「差紙」
176	18	1	覚 (金 4 両御貸附金請取に付)	亥12月22日	甲府御貸附御役所 (印) →国玉村金兵衛納	状	1	
176	22	1	大蔵寺御宮修復料貸附金受取 (金 1 両 2 分)	亥12月22日	増田安兵衛手代桑山圭助 (印) 他 2 名→山梨郡国玉村拝借人金左衛門	状	1	巻き込み外→内、176-22-1 ~ 2 止
176	22	2 止	大蔵寺御宮修復料貸附金受取 (金 1 両 3 分、永 172 文 4 分)	亥12月22日	増田安兵衛手代桑山圭助 (印) 他 2 名→山梨郡国玉村拝借人金兵衛	状	1	

176	24	2 止	下河東村荒地手当貸附金受取 (金 2 両 2 分、永 150 文)	亥12月22日	増田安兵衛手代桑山圭助 (印) 他 2 名→国玉村拝借人甚左衛 門	状	1	
176	3		覚 (金 3 両 2 分 2 朱ト 鑑 266 文助成金上納)	12月4日	二郎左衛門 (印) → 甚左衛門 殿	状	1	
72			(書状、国玉村次郎左衛門当役 所金拝借願い金 50 両貸し渡す に付)	12月26日	加川安右衛門柳沢友右衛門柳 沢甚右衛門→鯉江幸蔵様田中 盾之助様	豎	1	包紙表書「鯉江幸蔵様 田中盾之助様柳沢勘右 衛門加川安右衛門」、裏 書「国玉村江渡」
59			救粉金差出名前并割渡帳	-	-	豎	1	虫損
34			甲府御貸附金書類 (袋)	-	-	袋	1	「売渡申田畑証文之事」 の反故 (文久 2 戌年正 月日)
45			乍恐以書付御敷願奉申上候 (笛 吹川押流ほかの普請仰せ付け られたきに付)	-	-	状	1	案文
137			(御貸附金拝借相違なきに付)	-	内海多治郎支配所国玉村長百 姓甚左衛門他 3 名→甲府御役 所	状	1	奥に「二」と有。写カ
139			名寄帳小拾書拔 (反別合 8 反 6 畝 12 歩、高 16 石 4 斗 1416 合)	-	内海多治郎支配所国玉村→甲 府御役所	状	1	奥に「四」と有。写カ
140			覚 (上田 1 反質入値段金 9 両 1 分に付)	-	→甲府御役所	状	1	奥に「五」と有。写カ
141			(白紙)	-	-	状	1	
142			差出申拝借証文之事 (御貸附 金 60 両)	-	-	状	1	奥に「一」と有。写カ
159			対談議定書之事 (安政 4 年水 難御救御手当金延引に付)	年号月日	向村長百姓九兵衛・元長百姓 善 (ママ) 衛跡相続人安平→ 同村名主元助殿へ外誰殿へ	豎	1	162 と関連カ
162			対談議定書之事 (去巳年水難 御救御手当金割合方延引に付)	-	-	状	1	下書、159 と関連カ
174			土橋掛ヶ替仕様帳	-	名主甚左衛門他 2 名	豎	1	奥書「御普請役三浦春 七郎・篠崎為一郎」
176	11		(国玉村卯御年貢割戻し金 3 両 ほか、金 3 両永 39 文 3 分 7 厘 3 毛金銭書上)	-	-	状	1	綴痕有
176	23		(去酉拝借金国玉村甚左衛門分 書上)	-	-	状	1	176-24 を巻き込み、 外→内、包紙カ
176	2		覚 (金 2 両 3 分 11 人御料理代 他請取)	月日	松坂屋 源右衛門→ -	状	1	

02 名主 / 03 用水組合								
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	量	備考
233	1		六ヶ村用水路割合帳	嘉永3年辰11 月29日	名主甚左衛門	横	1	現状記録段階で 233 は 一点だったが目録作成 時に二点であることが 判明した
233	2 止		八樋諸入用割合帳	安政2歳酉2月	六ヶ村組合	横	1	現状記録段階で 233 は 一点だったが目録作成 時に二点であることが 判明した
116			内済証文之事 (逢沢村より西 高橋村へ多分入用を町分割を 以て出金致す儀に付)	安政2卯年6月	逢沢村名主伊七他 13 名	状	1	括り紐有。包紙上書「逢 沢村より西高橋村江相 掛り水論一件取扱候二 付内済済口証文連印巻 通受取置申候、安政二 年七月日 名主甚左衛 門」
219			六ヶ村組用水入用小割帳	安政2卯年7月 5日	国玉村外五ヶ村立合	横	1	
5			六ヶ村組用水路臨時入用帳	万延元年申3 月	国玉村名主甚左衛門	横	1	袋は 16
16			六ヶ村用水諸入用并諸事諸類 入帳袋	万延元年3月 吉日	山梨県国玉村甚左衛門	袋	1	中身は 5

193		六ヶ村組合用水諸入用勘定帳	万延元年12月吉日	山梨郡国玉村名主甚左衛門	横	1	
97		乍恐以書付奉伺候 (甲府三之曲輪御堀通へ新規水車は私共難渋、水災増さざるように付)	文久2年8月	内海多次郎御代官所甲州山梨郡小西村役人惣代長百姓次左衛門 (印) ほか 6 人→御普請御掛御役人中様	状	1	
77		当子六ヶ村用水入用割合帳	元治元年8月29日	国玉村外五ヶ村役人中	横	1	六ヶ村：向村・上河原村・七澤村・国玉村・西高橋村・逢沢村
154		差上申御請書之事 (向村地内御堤切所弁金御免除に付)	慶応2寅年9月10日	国玉村役人惣代長百姓金兵衛・里吉村同名主次右衛門→石和御役所	状	1	
147		為取替申人撰之事 (助合御普請并濁川通定式御普請役掛り出金に付)	慶応3卯年2月日	上河原村名主作右衛門他 19 名	状	1	
51		乍恐以書付御歎願奉申上候 (組合用水水樋普請の手当、御仁恵の御沙汰を願うに付)	9月晦日	清水孫次郎御代官所山梨郡国玉村名主甚左衛門 (印) ほか 6 名→御普請御掛御役人中様	状	1	端裏書朱書「九月晦日川田村江差出ス国玉村」
136		差出申一札之事 (六ヶ村御組合用水路竹通伏せ込みたく切り割りのところ六ヶ村役人中立腹、申し訳なきに付)	(未年)	-	状	1	後欠。綴痕有
123	1	覚 (向村急破御普請弁金村割合甲銀受取状)	午12月16日	上河原村鷹野善右衛門→御名主中様	状	1	袋とも、袋裏書「向村字中之嶋御普請弁金破紙袋 (ママ) 治治三年午八月日 名主甚右衛門」袋表書「家秘清浄製青山」袋裏印「甲府一連寺町河内屋太兵衛諸国御茶自製所」
123	2	覚 (小丈縮入 2 枚代金 3 分請取)	11月10日	口屋定七→上	状	1	朱筆で反古としている
123	3	(絵図面)	-	-	舗	1	
123	4	覚 (国玉村外 5 ヶ村用水官普請人足扶持米 4 斗勘定に付)	未4月11日	甲府県庁 (印) →川田村役人	状	1	
123	5	覚 (東花輪村川除定式御普請人足扶持米 3 石勘定に付)	午8月19日	甲府県庁→国玉村役人	状	1	後筆「写」
123	6	(2両2分1朱銭100文金銭書上)	-	-	状	1	
123	7	覚 (東花輪村用悪水路御普請人足扶持米 1 石 3 斗勘定に付)	午8月19日	甲府県庁→国玉村役人	状	1	「写」
123	8	覚 (下条東割村官普請人足扶持米 10 石勘定に付)	未2月20日	甲府県庁→国玉村役人	状	1	「写」
123	9	覚 (合 70 匁 5 分 6 毛割合に付)	11月29日	湯川組合里谷村名主七津新兵衛他 4 名	横	1	綴られていないが3点が1つの資料として把握
123	10	覚 (大工弥太郎他 13 貫 74 文他金銭書上)	-	-	横	1	
123	11	水防小屋式ヶ軒水車出来屋割合帳	明治3年庚午9月21日	向村名主良造他 14 名	横	1	7ヶ村 (国玉・里吉・蓬沢・西高橋・七沢・上河原・向)
123	12	覚 (向村字中之嶋村東水防組合他金 4 両と甲銀 3 分 6 厘 8 毛受取に付)	庚午10月5日	上河原村名主弥右衛門 (印) →国玉村御名主甚右衛門様	状	1	
123	13	覚 (甲銀 544 匁 7 分 6 厘 8 毛他金銭書上)	-	国玉村	状	1	
123	14	覚 (向村川除割合弁金金 4 両受取)	当午9月29日	上河原村名主代多右衛門→国玉村御名主様	状	1	
123	15	(水防入用割合取調べ、国玉村分 3 貫 368 匁 3 分 8 厘他金銭書上)	-	-	状	1	
123	16	(村分 71 石 3 升 9 合 6 夕他町分石高・金銭書上)	-	-	状	1	朱書有
123	17	覚 (大工 12 人他 945 匁 2 分向村御役人中より御無心に付)	午9月13日	国玉村甚左衛門・藤右衛門→上河原村御名主縫右衛門様要青	状	1	

123	18	(書状、向村御普請諸色小屋出金の程此者へ御渡し下されたい旨などに付)	午9月24日	国玉村甚左衛門(印)他1名→里吉村・蓬沢村・西高橋村・七沢村・上河原村・向村右御村・御役人中	状	1	包紙とも。「廻章一通外ニ割合帳を冊国玉村」
123	19	覚(蒲団2枚請取に付)	未3月19日	八日町名主奥村惣右衛門(印)→国玉村御名主中	状	1	
123	20	覚(甲銀544匁7分6厘8毛御渡しに付)	廿(ママ)月5日	上河原村縫右衛門→国玉村御名主中様	状	1	
123	21	(借用證文残欠、来ル十月中旬に返済の旨)	安政6未年6月日	山梨郡国玉村借用人藤右衛門他2人→八日町三丁目平兵衛殿	状	1	前欠。印には全て消印有
123	22	覚(べ12匁3分3厘、甲2分6厘受取)	庚午11月29日	竹のや 文助(印「甲府[]」)→国玉村甚左衛門様他2人	状	1	
123	23	(夏夫其外金銭差引、市川理右衛門様分書上他)	-	-	状	1	
123	24	覚(金10両他金銭書上)	-	-	状	1	
123	25止	覚(金4両、向村川除割合弁金受取)	当午9月25日	上河原村名主代多左衛門(印)→国玉村御名主様	状	1	

02 名主 / 04 御用留・日記							
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	備考
156			甲府出勤諸用扣帳	万延元申年2月吉日	国玉村安之丞	横	1
122			御用日記帳	明治2年巳4月吉日	山梨郡国玉村甚右衛門	横半	1
85			御用村用日記帳	明治3年午2月吉日	山梨郡国玉村長百姓甚右衛門	横半	1
35			御用状御廻状請取帳	明治3年庚午8月朔日	山梨郡国玉村	横	1
121			御用村日記帳	明治3年庚午8月吉日	名主鷹野甚左衛門	横	1
181			御用状御廻状請取帳	明治3年庚午12月日	鷹野甚右衛門	横	1 表紙「第式番帳」
172			御用村用日記帳	明治4年辛未正月日	-	横	1 裏書「山梨郡国玉村名主鷹野甚右衛門」表紙上書「第式番帳」
6			御用出先日記帳	明治4年辛(マ)10月	福保扣	横半	1

02 名主 / 05 名主役							
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	備考
7			乍恐以書付御利解下ヶ奉願上候(名主役交代滞の内済について)	嘉永3戌年9月	山梨郡国玉村名主惣兵衛百姓代安次郎ら11名→石和御役所	状	1 「乍恐以書付御利解下ヶ奉願上候」の件について連印の後、「差出申一札之事」という題の件あり。端裏「此内三通写置候」九月廿一日夜甚左衛門の文字初めにあり。
149			内議定所之事(仕来り通り名主役隔年番と取り極めるに付)	嘉永4亥年9月23日	山梨郡国玉村長百姓安次郎(印)他6名	状	1 端裏書「内役一同議定」
74			為取替申内議定之事(当村方名主役順年番に相勤めるべきに付ほか)	嘉永4亥年9月24日	山梨郡国玉村市太郎他6名→同郡同村御同役甚左衛門殿	状	1
150			対談議定書之事(名主役藤吉万一持病差し発の節、安次郎引き請けに付)	嘉永4亥年9月	山梨郡国玉村名主藤吉(印)他8名	状	1
10			入置申一札之事(名主役来辰8月長百姓金兵衛殿へ相渡すに付)	安政2卯年8月日	山梨郡国玉村長百姓金兵衛(印)他41名→同村名主甚左衛門殿	状	1 封紙表書「名主役長年ニ附小前連印證文を通外儀定忝通入」、裏書「安政二卯年八月吉日山梨郡国玉村名主甚左衛門」

53		為取替申内議定之事（年貢名主役を金兵衛受けかねるため当年に限り入札とし、その際酒などを遣わさないに付）	安政2卯年8月8日	山梨郡国玉村長百姓安治郎（印）ほか4名→同村長百姓甚左衛門殿	状	1	端裏書「内役議定書」
124		為取替申内議定之事（当村方名主の儀、当卯年に限り入札に付）	安政2卯年8月8日	山梨郡国玉村名主甚左衛門他4名→同村長百姓藤右衛門殿	状	1	
164		議定書之事（当村名主役交代の儀、年季明け戌年相談に付）	安政4巳年8月8日	国玉村名主金兵衛他40名	状	1	
88		頼状之事（病心のため長百姓の御用村用たのむに付）	安政7申年3月8日	国玉村長百姓安次郎（印）→同村名主甚左衛門殿	状	1	
23		名主役交代御願証文（当年長百姓金兵衛に名主役仰せ付けられたきに付）	元治元子年8月8日	山梨郡国玉村名主甚左衛門（印）他44名→石和御役所	豎	1	内題「乍恐以書付奉願上候」
101		名主役交代御願証文（長百姓甚左衛門名主役仰せ付けられたきに付）	文久3亥年8月8日	山梨郡国玉村柳助（印）他45名→石和御役所	豎	1	名主藤左衛門
87		名主役交代御願証文	慶応3卯年8月8日	山梨郡国玉村名主甚左衛門（印）ほか46名（印）→石和御役所	豎	1	
24		名主交代証文（当年市川金兵衛へ名主役仰せ付けられたきに付）	明治4年辛未8月8日	国玉村名主鷹野甚右衛門（印）他43名→甲府御役所	豎	1	内題「乍恐以書付奉願上候」

02 名主 / 06 質地・借金							
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	備考
70			借用証文之事（已より午まで不作のため粉メ6俵2桶借用に付）	安政6未年7月8日	国玉村借用人清左衛門（印）ほか19名	状	1
69			頼一札之事（私共兩人建家罷り在る地他へ質渡され差し支え、請け戻したく無心致すに付）	文久3年亥3月15日	国玉村頼人鎌吉（印）ほか1人→上連雀町庄五郎殿ほか1人	状	1
28			仮対談書之事（国玉村百姓二郎左衛門質地請戻し一件に付）	文久3亥年5月11日	願人甲府連雀町幸十郎弟陣平（印）他9名→石和御役所	状	1
42			乍恐以書付御利解下奉願上候（甲府上連雀町家持幸十郎、二郎左衛門へ質地の所流地内済願いに付）	文久3亥年5月	当元御代官所山梨郡国玉村願人百姓鎌吉（印）他9名→石和御役所	状	1
67			対談書之事（我等一件納得の上御願下げいたし、質地相違なく請け戻させ申しべきに付）	文久3亥年5月8日	甲府上連雀町孝重郎弟陣平（印）ほか7人→八代郡広瀬村藤兵衛殿ほか1人	状	1
17			対談書之事（幸十郎質地請戻の儀当村役人中取り計いに任せるに付）	文久3亥年12月28日	山梨県国玉村二郎左衛門（印）他2名→同村御役人中	状	1 印消
26			一札之事（国玉村内8反1畝5歩の田畑屋敷の儀御役人中へ進退御任せに付）	文久4年子正月	甲府上連雀町地主幸十郎（印）他2名→山梨郡国玉村名主甚左衛門殿他1名	状	1
30			一札之事（幸十郎田地増金残金25両を以て返済致すべきに付）	文久4年子正月	上連雀町幸十郎弟陣平（印）他1名→国玉村名主甚左衛門殿他1名	状	1
102			一札之事（幸十郎殿所持8反1畝5歩の儀、甲金50両へ35両差し加え前本証文認め替えの節調印下されたきに付）	文久4年子正月	国玉村名主甚左衛門・長百姓藤右衛門→上連雀町幸十郎殿・陣平殿・庄五郎殿	状	1
3			相渡申質地証文之事（屋敷2反2畝28歩ほかメ反別8反1畝5歩）	文久4甲子年2月	上連雀町地所渡主幸十郎（印）ほか2名→山梨郡国玉村甚左衛門殿	状	1 裏書（国玉村長百姓長右衛門（印））
29			入置申対談書之事（今般7反3畝15歩の地、割地にて御譲渡下され忝なきに付）	文久4子4月	国玉村二郎左衛門（印）他2名→同村甚左衛門殿	状	1
46			流地証文之事（質地請戻相成かね元金甲金50両請取流地に付）	文久4子年4月8日	上連雀町売主孝十郎（印）ほか2人→山梨郡国玉村甚左衛門殿	状	1

173		借用申證文之事（甲府一条町新吉殿より金子借用のため御所持の田地札3枚に付）	明治3午年6月日	国玉村借用人良兵衛（印）他2名→同村金兵衛殿	状	1	
49		川田一件取調扣帳（川田村より借用米俵数書上）	明治4年辛未4月日	国玉村名主鷹野甚右衛門	横	1	
13		入置申質地證文之事（反別合5反2畝歩）	明治4辛未年5月日	国玉村質地主武井安右衛門（印）・同村證人鷹野甚左衛門（印）→甲府下一条町志村新吉殿	状	1	裏書（国玉村名主鷹野甚右衛門（印））
105		預り申金札之事（御年貢手当要用金の内金25両受取）	明治4年辛未7月日	山梨郡国玉村預り人鷹野甚右衛門（印）→逢沢村小野九兵衛殿	状	1	
8		一札之事（田地請戻しの儀、当村役人中に御任せ致したなら掛合の者子細申すまじくに付）	-	山梨郡国玉村名主甚左衛門・藤右衛門→上連尺町幸十郎殿・陣平他1名	状	1	受取破れ
58		質地證文通（包紙カ）	-	国玉村質地主二郎左衛門	状	1	
146		田地證文流地證文式通・幸十郎一件対談書式通	-	-	包紙	1	

02 名主 / 07 国玉村・村人関係							
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	量 備考
125			為取替申内議定之事（当村方名主の儀、当卯年に限り入札に付）	安政2卯年8月日	山梨郡国玉村名主甚左衛門他4名→同村長百姓安治郎殿	状	1
9			差出シ申御託書之事（伊左衛門葬式高声申し御耳に障り差し当り預るに付）	安政3辰年4月日	佗人清十郎他2名→御役人	状	1
110			御札ニ付以書付奉申上候（友七去月27日より家出、立ち戻らざるに付）	卯10月	佐吉・名主甚右衛門→-	状	1 端裏書「佐吉御札書面」下書カ
126			差上申御請書之事（国玉村百姓久次郎他1名村預り御免に付）	卯	右村名主甚左衛門・長百姓藤右衛門・百姓代瀬平→石和御役所	状	1
178			乍恐以書付御訴奉申上候（国玉村二郎左衛門儀、国玉大明神神主屋敷添桑伐り取り、行方知れずに付）	西5月21日	当元御代官所山梨郡国玉村百姓二郎左衛門組頭惣代名主甚左衛門（印）他2名（印）→石和御役所	状	1 下書
66	1		指出申一札之事（是迄諸出入向宜からず以来改心仕り村法背くまじきに付）	亥12月29日	国玉村二郎左衛門（印）ほか1人→同村甚左衛門殿ほか1人	状	1 包紙・括り紐共。包紙上書「證文式通 二郎左衛門」66-2・66-3も包紙一括。
66	2		差出申一札之事（是迄諸出入ほか心得違い、以来村作法背くまじきに付）	-	-	状	1 66-2・66-3 巻き込み。外→内で番号付与。66-1の下書カ。
66	3		一札之事（別紙一札差し出し拙者どもにおても不実意の取り計り致すまじきに付）	-	-	状	1 下書カ
127			差出御託書之事（去月18日貴殿に対し龜言申し上げ、申し訳なきに付）	年月日	-	状	1 端裏書「此本書者人ヲ以相侘候ニ付、返之遣之侘書ノ写」
134			乍恐以書付御訴奉申上候（二郎左衛門儀、国玉大明神神主朱印地添いの桑木伐り取り一件に付）	-	当元御代官所山梨郡国玉村百姓二郎左衛門組合謙蔵他15名→石和御役所	豎	1 下書
135			（甲斐国山梨郡国玉村明細帳）	-	-	豎	1 11丁目袋に状1有。「水損田畑八一前書上帳 山梨郡国玉村」

02 名主 / 08 金銭受取							
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	量 備考
166	1		請負證文之事（大橋石垣、沼川橋代金17両2分出に付）	明治3庚午10月日	甲府愛宕町請負人常兵衛（印）・同山元次右衛門〔印〕→国玉村御役人中	状	1 166-1～3 巻き込み（内→外）

166	3		覚 (石代金 3 両請取)	午年閏10月9日	愛後町治右衛門→国玉村御名主所	状	1	
166	2		覚 (大橋石垣金 2 両請取)	10月27日	愛宕町恒兵衛 (印)・山本治右衛門→国玉村御名主様	状	1	

02 名主 / 09 寺社								
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	量	備考
100			小作手形之事 (御除地初 2 俵)	弘化2巳年正月	唐泊村小作人善兵衛他 1 名→広瀬村河野兵庫様	状	1	
175			差出申一札之事 (信州松本家中唐澤三郎左衛門倅矢口左門殿儀、今般其村方三之宮御社家役に御取抱御願申すに付)	嘉永7甲寅年2月5日	八代郡二ノ宮社家星野下総 [花押]・山梨郡国玉村長泉寺 [印]→国玉村甚左衛門殿・同村佐吉殿	状	1	端裏書「当時矢口左門之願書」
64			差上申済口証文事 (甲府元城屋町八幡宮守護神主 138 人のうち 121 人惣代八王子権現神主河野兵庫より諏訪明神神主土屋式部外 2 人のかかる押領出入内済に付)	安政2卯年4月	甲州八代山梨巨摩郡神主惣代森田国太郎御代官所同州八代郡米倉村御朱印地鉾立明神神主米倉市正外百貳拾人惣代同御代官所同州同郡広瀬村御朱印地八王子権現神主訴訟方河野兵庫 (印) ほか 1 名→寺社御奉行所	状	1	
44			議定書之事 (水災相遭祈念の節外へ神主故障出訴に付)	文久2戌年6月	蓬沢村名主九兵衛 (印) ほか 5 ケ村 10 人	状	1	
54			乍恐以書付御利害下奉願上候 (城福寺田畑作徳金滞り対談違変に付)	己亥5月4日	小田切土佐守支配所甲府愛宕町新義真言宗宝蔵院役僧通達 (印) 他 1 名→石和御役所	状	1	

03 副区長								
No	No	No	表題・内容	年代	作成・受取	形	量	備考
36			(布達書上、田方内見帳を御庁へ差し出すべきに付)	(明治6年9月20日)	-	状	1	よこ帳くずれ。詰所第 26 号、乙第 144 号ほか
220			(御用留、通達控)	明治6年10月18日～明治7年1月11日	-	帳外れ	1	帳外れ 30 丁
185			当酉御年貢勘定帳	明治6年12月日	戸長 武井唯八郎	横	1	
92			(御村 - 御両 3 人ずつ御出張下されたきに付、他)	(明治6年)	-	横	1	前欠、布達・回章などの写
133			(布達 耕地など取り調べるべきに付他)	(明治6年)	-	綴	1	綴痕有。帳はずれ 27 枚。132 と関連カ
230			乙第七号 (紋紬税二納期月本年より改定の旨)	明治7年1月13日	権令藤村紫朗代理山梨県知事富岡敬明→各区正副区長・同戸長	状	1	綴痕あり。帳外れであるため内容が前後欠でないものを目録化した
94			(番外東京日日新聞ほか写)	明治7年1月23日～4月19日	-	横	1	前後欠、御用留カ
11			(実名にて受取旨他達)	(明治7年)4月23日	副区長	横	1	帳はずれ 3 丁
242			甲府新聞六十六号 五号順達表 (御達の折、村名下に受印し、順達すべきに付他)	明治7年	-	状	1	横帳綴でとじられた痕あり。御用留の一部カ
132			(布達 旧暦 22 歳の者取り調べ連名簿など差し出すべきに付他)	(明治7年)	-	横	1	綴痕有。帳はずれ 2 枚。133 と関連カ

ENGLISH SUMMARY

Comments on the Index of the Kunitama Village Documents of the Yamanashi district, Kai province NISHIMURA Shintarou

This paper summarizes the efforts to preserve historical records and the research activities of Professor Shintaro Nishimura and participants in the Specialized Seminar in Japanese History, a Graduate Course in History that has been offered since 2010 at the Graduate School of Humanities. Specifically presented in this paper are comments on the index of the Kunitama village documents (Yamanashi district, Kai province), explanations of major issues that attracted interest from the participants, and the methodology used for republication and photographing of Kunitama-mura village report documents (mura meisaicho) in order to discover and reveal the character of the area. The Kunitama village documents are made up of 336 records from the 4th year of Tempō (1833) to the 7th year of Meiji (1874). These documents are the first of this area to be found and are therefore not recorded in “The History of Yamanashi Prefecture.” Many of these documents refer to aspects such as deprivation due to land tax, transportation of rice, and water management; also included are some private documents of the Takano family, the head of which had acted as the village headman. These documents are therefore valuable materials for researching and analyzing villages adjacent to the local castle town. Summaries of the index and related articles formed the basis of the research conducted for this paper.

Key Words: Yamanashi prefecture, province of Kai, preservation of historical records, index, archival science